

41808

教科書文庫

4
810
41-1930
200030
2000

5.0
11.0

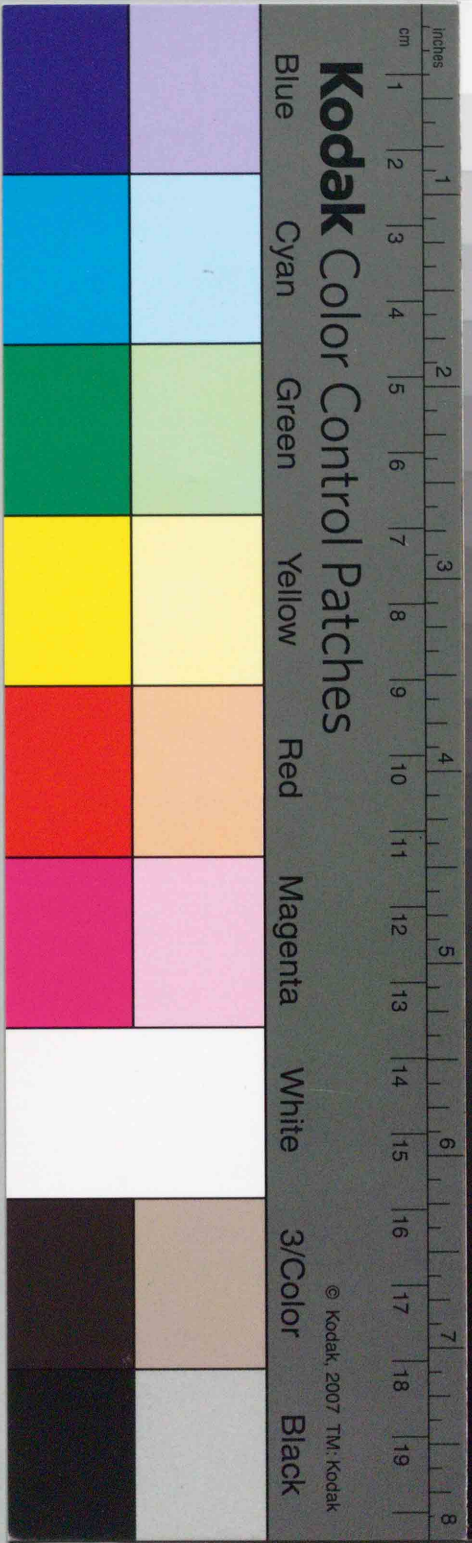
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches



© Kodak, 2007 TM: Kodak



95P
1920
3

學中
書科教文國
二卷



教
4
20



資料室

教科書文庫
4
810
41-1930
2000302000

375.9
Y019



文 部 省 檢 定 濟
昭 和 五 年 一 月 廿 一 日 中 學 國 語 教 科 用

中 國 文 教 科 書

卷 二

吉 田 彌 平 編

東 京 光 風 館 藏 版

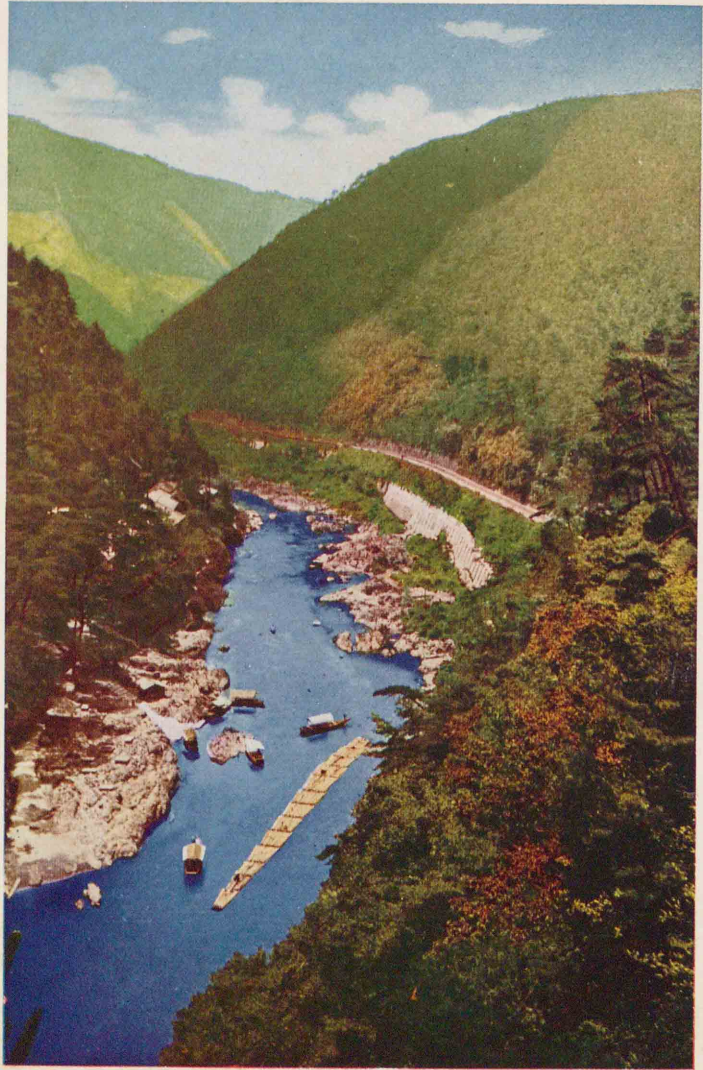
廣 島 大 學 圖 書

2000302000

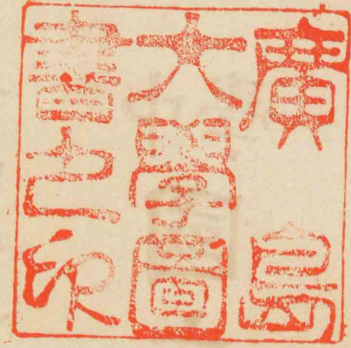


中 國 文 教 科 書 卷 二
吉 田 彌 平 編

東 京 光 風 館 藏 版



保津川下り



大蔵林書



東京 天風堂

中國文教科書卷二

目次

一	近畿の秋色	田山花袋	一頁
二	旅心	白鳥省吾	七
三	鞍馬の火祭	志賀直哉	九
四	小さな旅人	薄田泣菫	六
五	文鳥	夏目漱石	六
六	兜蟲	吉村冬彦	五
七	保津川下り	徳富健次郎	四〇

八 果物……………正岡子規 九

九 柿二つ……………高濱虚子 五

一〇 寓言二則……………柳澤淇園 三

一〇 かんにん……………室鳩巢 三

一一 愚公の山……………五十嵐力 三

一一 鳥飼藏人……………櫻井忠温 七

一二 戦場の今昔……………最後の肉弾……………われもかう……………東郷元帥とルーズヴェルト……………千代の松原……………大類 伸 三

一三 東郷元帥とルーズヴェルト……………小笠原長生 八

一四 千代の松原……………大類 伸 三

一五 鳩……………三木露風 六

一六 月桂冠を目指して……………一〇〇

一七 藤樹先生……………橘 南 谿 二三

一八 知行合一……………南條文雄 一九

一九 雪は降る……………堀口大學 一四

二〇 雪夜の宴……………大町桂月 一七

二一 ペンギン……………杉村楚人冠 一四

二二 春待つ心……………相馬御風 一五

二三 シベリヤの旅……………一四九

二四 浦潮より……………太田覺眠 一六

二五 角笛の響……………吉江孤雁 一六

二六 專心……………北原白秋 一八三

二七 伊能忠敬……………幸田露伴 一九二



中國文教科書卷二

一 近畿の秋色 田山花袋

田山花袋
名は録彌
小説家
紀行文家
明治四年群馬縣
館林町生

佐保川
奈良市の北を流
れる小川

秋は深くなつた。紅葉蘆荻。葉の落ちたあとに残つた柿の實二つ三つ。碧くくつきりと晴れた空。

奈良の古都に一日往つて遊んだ。東京の友だちに繪葉書一枚書く。その文に、
蘆荻の白と柿の實の紅との交錯せる佐保川のかれ

濱寺
大阪府泉北郡濱
寺町



濱寺公園

う友人は指さした。

なる水を指さしながら、靜かに奈良の古都に入り申し候。一人旅も興多く候。東京の郊外とは異なり、到る處、名勝古蹟に満ちたるが嬉しく候。夕暮近く一友と濱寺の海邊に出で見た。ふと見ると、大きな灼金のやうな圓い、光芒のない日輪が、今少して波に沈まうとしてゐた。「あ、好い、見給へ。」か

日輪が波に觸れたと思ふと、ぢき二分三分と沈んで、すっかり沈んでしまふのも瞬く間であつた。顧みれば、岸の松林の上に、十四日の月が白く出てゐる。

日は西に、月は東に、海と山と

うち向ひてぞ暮を待ちける。

平凡だが、まづ詠みおほせた氣がした。その後熊谷直好の歌に何か似よつたのがあつたやうに思つて、調べて見ると、

日は海に、月は山より、この夕

出づるも入るもあかぬ影かな。

といふのであつた。古人もやはりかやうな落日の光景に對したことがあつたと思はれる。

熊谷直好
國學者
歌人
今の山口縣岩國
町の人
文久二年(三三三)
歿
年八十一

ヴェランダ

Verandah

大文字

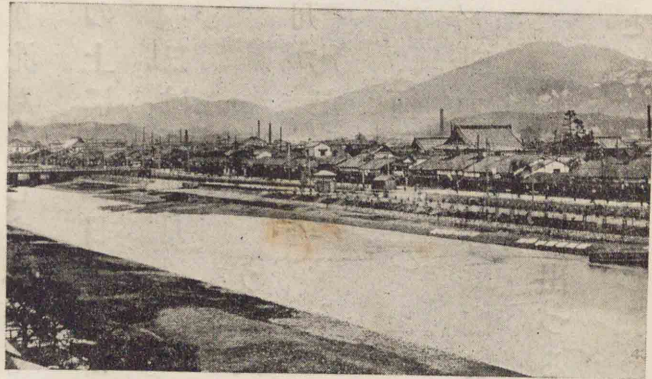
如意が岳の一名
東山の一峯

比叡

近江・山城の國
境に峙つ山

鴨川

京都市の東部を
流れる川



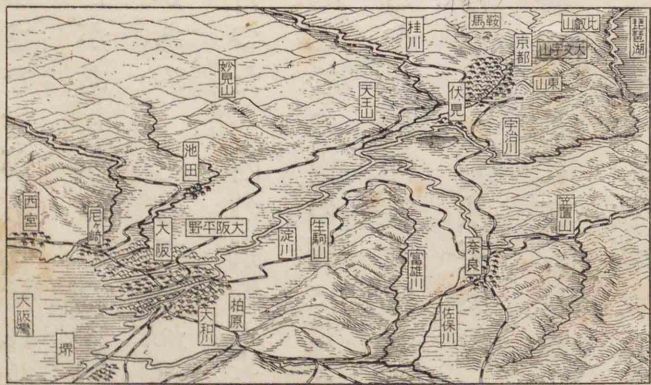
鴨川

今度泊つた京都の宿の、日本式のヴェランダと言つたやうな處で、私は月光に薄く線を引いたやうに靡いてゐる東山の連峰を眺めた。大文字・比叡あたりまで、それと微かに指された工合は、何ともいはれなかつた。私は靜かに左顧右眄した。千年來の古都といふ感じが、ちらくする燈の影や、鴨川の水の音や、折々響いて來る電車の音にまじり合つて、私の胸に迫つて來た。

生駒山脈
大和と河内との
境に連亘する山
脈
トンネル
Tunnel
隧道

大阪の旅舎では、自分の部屋に充てられた二階の座敷のすぐ下に掘割の水が澄んで、だぶくと湛ひて、その上を、軽い艀の音と共に舟が靜かに通つて行く氣分が私の心を惹いた。流石は秋だ、秋の水だと私は思つた。

生駒山脈を貫いたトンネルを出て、それから奈良の古都まで往く間は、大阪平野からトンネルまで往く間より、もずつと趣味



京都奈良附近

西の京
古の奈良の都の
西部

に富んでゐるのを私は見た。そこは低い丘陵の起伏したやうなところで、小さな谷があり、小さな村があり、折れ曲つた溪流があり、蘆や薄に映える夕日があり、赤い柿の實があり、黄色に熟した山谷の狭い水田がある。そしてそれが段段奈良の古都のある平地へ出て行つた。西の京近くなると、多くの名刹の古い金堂や高い塔が、松の樹の間に見えつ隠れつしてゐる。私は旅情の漲るやうに押寄せて來るのを感じた。その電車には、途中の停車場から、秋葉あきば奠かの一杯についた枝と、赤い枝柿と、松茸を狩つて薄に包んだのとを持つて乗つて來る人などがあつた。田舎の秋がそこにあるやうな氣がした。(山水處々)

白鳥省吾
詩人
明治二十三年宮
城縣築館町生

二 旅心

白鳥省吾

秋空晴れて、
峠の路は露に濡れ、
漆の葉緋と燃えて、
あけびは熟し、
栗もこぼれる。

峠をおりるわたしたちに
沿うて流れる谷間の水は、
深い樹立の奥にせゝらぎ、



ぶなの樹に猿が遊ぶ。
炭を負うてくる逞しい炭焼の女
路を避けつゝ珍しげに
山のかなたに反響する歌は、
先發の人々の聲か。

あゝ急がうよ、
秋の風さわやかに、
谷間の水も歌ひつゝ、
人里を慕ひゆく旅心。

(明治大正詩選)



志賀直哉

文學者

明治十六年宮城

縣石巻町生

鞍馬

京都府愛宕郡鞍

馬村

山中に鞍馬寺と

いふ天台宗の古

寺がある

三

鞍馬の火祭

志賀直哉

十月二十日過、私は二三人の友達と鞍馬へ火祭といふのを見にいつた。暮方に京都を出て、北へくと幾らか登りの道を三里程行くと、遠くの山の峽がほんのり明るく、その邊一帶淡く煙の立籠めてゐるのが眺められた。苔の香を嗅ぎながら、冷えととした山氣を浴びて行くと、この奥にさういふ夜の祭があることが不思議に感ぜられた。子供づれ、大人づれの見物人が提燈をさげて行く。それを、自動車、時々前の森や山の根に強い光を射つけながら追ひぬいて行く。山の方からは、五位鶯が啼きながら飛んで来る。そして行くほどに、幽かなくすぶり臭い匂がして來た。

町では家ごと軒先に、といつても通が狭いので道の真中を、
一列に焚火が並んでゐた。大きな木の根や人の脊丈ほど



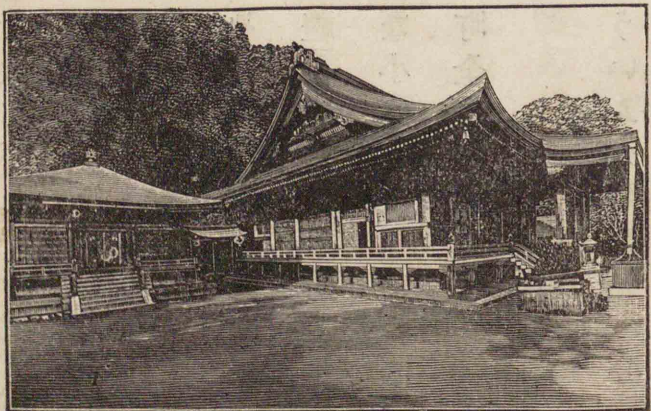
焚火の町

ある木切れて三方から圍ひ、その中に燃えてゐるのが、何か岩間の火を見るやうな一種の感じを起させた。焚火の町を出ぬけると、稍、廣い場所に出た。幅の廣い石段があつて、その上に丹塗にぬりの大きな門があつた。廣場の兩側は一杯の見物人で、その中を下帯一つに肩だけちよつとしたものを着て、手甲、脚絆、草鞋がけに身を固めた向ふ鉢巻の若者たちが、柴を束ねた

最澄

高僧
天台宗延暦寺の
開祖
勅諡傳教大師
弘仁十三年（一〇二二）
二月
年五十六

藤蔓で卷いた大きな松明を擔いで、「最澄祭禮」——これは本當ではないが、ちよつとさう聴きなされる掛聲をしながら、兩足を踏張り、右へ左へよろけつ、上手に中心を取つて歩いてゐる。或者はよろける風をして、わざと群集の前へ火を突きつけた。或者は家の軒下にそれを擔ぎこんだ。火の燃え方が弱くなり、自分の肩も苦しくなると、一抱ほどあるその松明を不意に肩から外し、どさり



鞍馬寺本堂

と勢よく地面へ投げおろす。同時に藤蔓がはじけて柴は開き、火は非常な勢で燃上る。若者はしばし汗を拭き、息を入れるが、やがて又別の肩にそれを擔ぐ。それも自分一人ではとても上げられず、傍の人から助けてもらふのである。この廣場を抜け、先の通へ入ると、そこにはもう焚火はなく、今の松明を擔いだ連中が「最澄祭禮」と聞える掛聲をして、狭い處を往きかふ。子供は年相當な小さい松明を、わざと重さうに、よろけながら擔ぎ廻る。町全體が淡く煙り、氣持のいゝぬくもりが感ぜられる。

星の多い澄渡つた秋空の下で、かういふ火祭を見る心持は格別だつた。一筋の低い軒並の裏はすぐ深い溪流になつ

てゐて、そして他方はまた高い山になつてゐるといふやうな處では、いくら賑はつてゐるといつても、その賑かさの中には、山の夜の静けさがしみ透つてゐた。これが都會のあの騒がしい祭より外知らぬ者には大變よかつた。そして、人々も一體に眞面目だつた。「最澄祭禮」この掛聲の外には大聲を出す者もなく、酒に酔ひしれた者も見かけられなかつた。しかも、それはすべて男だけの祭である。

或家で裸體の男が軒下の小さな急流に坐つて眼を閉ぢ、手を合せ、長いこと何か口の中で唱へてゐた。清いつめたさうな水が乳のあたりを波打ちながら流れてゐた。大きな定紋のついた、變に暗い提燈を持つた女の兒と、無地の麻帷

子を展げて持った女とが軒下に立つて、その男のあがるの

を待つてゐた。漸く唱言を終

へると、男は立つて、流の端に揃

へてあつた下駄を穿いた。帷

子を持つた女は濡れた體に黙

つてそれを着せかけた。男は

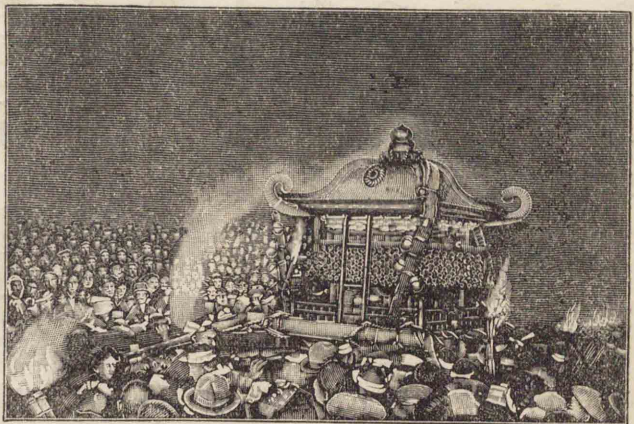
提燈を持たず、下駄を曳きずつ

て、すぐ暗い土間の中へはひつ

て行つた。これは、これから神

輿を擔ぎに出る男だといふ。

かういふ連中が、間もなく廣場の石段下に大勢集つた。そ



鞍馬の神輿

こには二本の太い竹に高く注連繩が張渡してあつて、その注連繩を松明の火で焼切つてからでなければ、誰もその石段を登ることが出来ないとのことだ。しかし繩は三間以上も高いところにあつて、松明を立てゝも、その火はなかなかそこまでは届きさうにない。澤山の松明がその下に集められる。その邊一帶、火事の時のやうに明るく、一刻も早くその焼切れるのを仰向いて望んでゐる群集の顔を赤く照し出してゐた。やがて火が漸く移り、繩が火の粉を散らしながら二つに分れ落ちると、抜刀を振翳した男が、非常な勢で眞先に石段を駈登つて行つた。群集はさけび聲をあげながら、すぐそれ

に續いた。しかし、山の門にもう一つ、それは低く、ちやうど人の丈よりちよつと高いくらゐに第二の注連繩が張つてある。先に立つた抜刀の男は、それを振翳したまゝ、駈抜け。注連繩は二つに切れる。そして群集は坂路を奥の院までそのまゝ、駈登るのである。私は友を顧みて言つた。

「どうだい、もう歸らうか。」

「お旅でやるお神樂を見て行かうよ。」

神樂といふのは、四五人で擔ぐくらゐの大きな松明をいくつか、神樂の囃子に合せて、神輿のまはりを擔ぎ廻るのである。

「大概もうわかつたぢやないか。」

お旅
祭禮の時神輿が
渡御あつて假に
鎮座する處

「何時だ。二時半か。」

時計を見ながら友達がいつた。

「これで京都へ歸ると、ちやうど夜が明けるかも知れませんよ。」

ともう一人の友達がいつた。

焚火の町では、来る時岩間の火のやうに見えてゐたのが、今は盛に燃えてゐた。町を出ると、急に山らしい冷氣が感ぜられた。私たちは時々振返つて、明るい山の峽を見た。道は往きより近く思はれ、下りで樂でもあつたが、やはり皆は段々疲れて、無口になつた。

「睡くてかなはん。」

叡山
比叡山

と一人がいつた。
「僕が腕を組んで歩いて上げるから、眠りながら歩き給へ。」
もう一人がさういつて、二人腕を組んで歩いた。
京都へ入る頃は、實際友達がいつたやうに、叡山の後ろから
夜がしら〜と明けて来た。(暗夜行路)

薄田泣菫

名は淳介

詩人

小品文家

明治十年岡山縣

連島町生

四 小さな旅人

旅人法

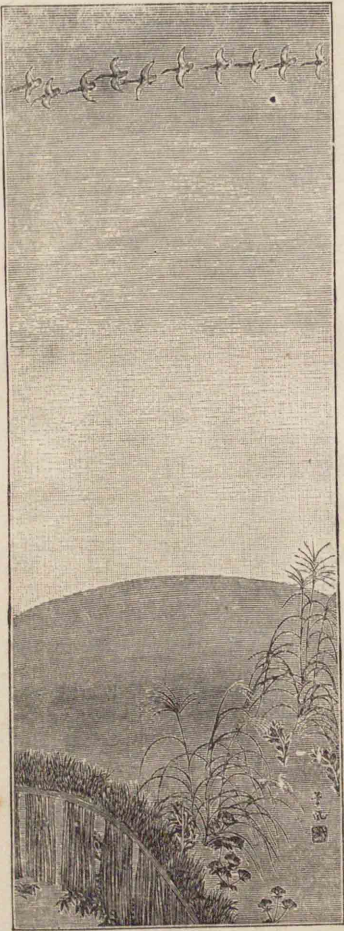
薄田泣菫

私たちが七つ八つの頃には、そろ〜秋が更けて來ると、晴
れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを見
かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎ
ながら、

雁よ、棹になれ。

棹になつたら鉤になれ。

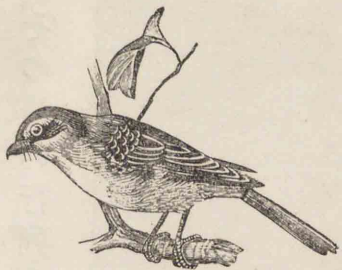
と、その長い行列が次第に雲の中ににじみこんでしまふま



過 雁 (筆風草野長)

で、聲を嗄して叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少なくなつて、今では晝間その長い列が空を渡ることは、よく〜
人氣の遠い野原でもないと、滅多に見られなくなつた。

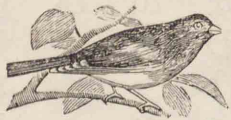
その頃は又、後ろの岡に行つて見ると、葉の落ちかゝつた雜木林に小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥といふと私は海などを越えて來る彼の小さな旅人のあわたゞしい旅を考へて、いつも言はうやうのない寂しい旅心地を覺える。



百舌

まづ百舌が來る。秋の彼岸が過ぎ、日影がそろ／＼黄色がかつて來ようといふ頃、私たちは、どうかすると、暖かい日の午過、そこらの木立で、甲高い、鋭いその聲を聞くことがある。「あゝ、もう秋だな」と思はず振返つて見ると、矮小な櫟にまじつて、ずばぬけて丈の高い榆の木に百舌が一羽止つて、

黄色い夕日を受けて、羽が金のやうにきら／＼してゐる。私たちはその瞬間、言はうやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覺える。



鶉

次には鶉が來る。山家の午過、だるさうな蟋蟀の聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寢返を打つ音までがはつきりと耳に入る。静けさの底に、どこやら糞れた人の溜息とでもいつたやうな微かな聲が洩れて來て、何の音ともわからない。すると、樹陰の、葦畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫がひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうな小鳥がついと身をそらして逃げていつて

しまふ。それが鶉だ。

鶉といつたら、まるで悲哀を抱いてゐる人のやうに、大抵は連に離れて、たゞ獨りて出て来る。そして、そこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよくりひよくりと軽い御辭儀をして、さゝやくやうな聲でうたひ出す。私はそれを見ると、他の爲、世の中の爲といつたやうなわけがなく、自分一人の爲にうたつて、それで満足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

鶉が來てもものゝ十日も經たぬ間に四十雀が來る。この鳥は鶉と違つて、十羽も二十羽も群をなして來る。山から里へ移る折などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音

が、さつと空を掠めて聞える。そして、そこらの木立におりるなり、めまぐるしいほどすばしこく、雀の、鶉などを啄きまはしながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見せ



雀 十 四

て、銀の鈴をふるやうな、透通つた聲で、早口にしゃべり續ける。で、かういふ大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない、灰色の産毛そのままの雛兒が交つてゐて、どうかすると、高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返ることもあるが、そこは又慣れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で、樹肌のひよを啄いたりする。まるで山家育ちのすばしこい、きさくな魂そのものを見るやうな氣持が

する。

小雪がちらつく頃になると、鷓鴣みせとくがが来る。これは鶉と同じやうに、大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして来る。冬の初の午過、山近い田舎の小家で、爺さんは炬燵に潛り込んで、こくり〜と居眠をする。その側で、婆さんは、せつせと絲車を繰つてゐる。檐に吊した干菜の影が煤けた障子に見すぼらしく映つて、時をり、ちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかして絲目が切れて、睡さうな錘の音がぱつたり止むと、こそ〜と、掛菜をむしる音がする。が、老人の耳にそんな音の聴取れようはずがない。



鷓鴣

婆さんは俯いたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、小鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよいひよいと小刻みに籬を傳つて、隣から隣へと狭苦しい物陰を出たり這入たりして移つて行く。それが鷓鴣である。鷓鴣と後先になつて頬白が来る。冷たい雨のびしよ〜と降る中を、獨者の頬白が灰色の胸までぐしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の啼聲を解いて、

一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな、火の用心。

今度は便に金十兩

やりたいたけれど、一文も御座なく候。
と言傳へてゐるのを思ひ出して、しみとくと世渡のむづかしさと、旅心の寂しさを思はずにはゐられない。

後ろの雑木林にこんな小鳥が来る頃になると、野にはもうそろそろ鶉が來、鶉が來る。(畿内行脚)

五 文鳥

夏目漱石

文鳥の眼は眞黒である。瞼の周圍に細い淡紅色の絹絲を縫附けたやうな筋がはひつてゐる。眼をぱちつかせる度に絹絲が急に寄つて一本になる。と思ふと、又圓くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首をちよつと傾けなが

夏目漱石
名は金之助
英文學者
小説家
江戸生
大正五年歿
年五十

ら、此の黒い眼を移して、始めて自分の顔を見た。さうして、ちよつと鳴いた。

自分は靜かに鳥籠を箱の上に据ゑた。文鳥はぱつと留り木を離れた。さうして又留り木に乗つた。留り木は二本ある。黒みがかつた青軸を程よき距離に橋と渡して横に並べた。其の一本を軽く踏まへた足を見ると、如何にも華奢に出来てゐる。細長い薄紅の端に眞珠を削つた様な爪が着いて、手頃な留り木をうまく抱へ込んでゐる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向を換へてゐた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首をふと持直して、心持前へ伸したかと思つたら、白い羽根が

又ちらりと動いた。文鳥の足は向ふの留り木の眞中あたりに工合よく落ちた。ちゝと鳴く。さうして遠くから自分の顔を覗き込んだ。

自分は顔を洗ひに風呂場へ行つた。歸りに臺所へ廻つて、戸棚をあけて、昨夕三重吉の買つて来てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、書齋の縁側へ出た。

三重吉は、用意周到な男で、昨夕丁寧な餌をやる時の心得を説明していつた。其の説によると、無暗に籠の戸をあけると、文鳥は逃げ出してしまふ。だから、右の手で籠の戸をあけながら、左の手を其の下へあてがつて、外から出口を塞ぐ

三重吉

鈴木氏

文學者

漱石の門人

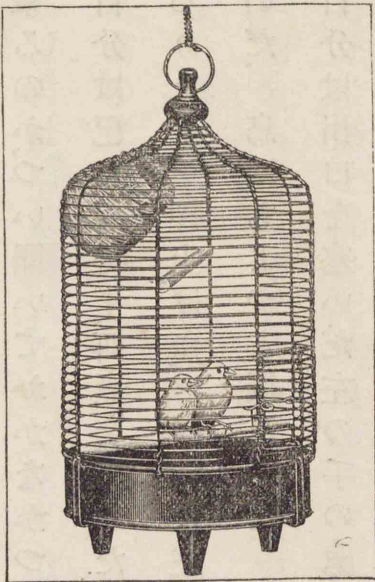
明治十五年廣島

縣生

やうにしなくては危険だ。餌壺を出す時も同じ心得でやらなければならぬと、その手つきまでして見せたが、かう兩方の手を使つて、餌壺をどうして籠の中へ入れる事が出来るのか、つい聞いておかなかつた。

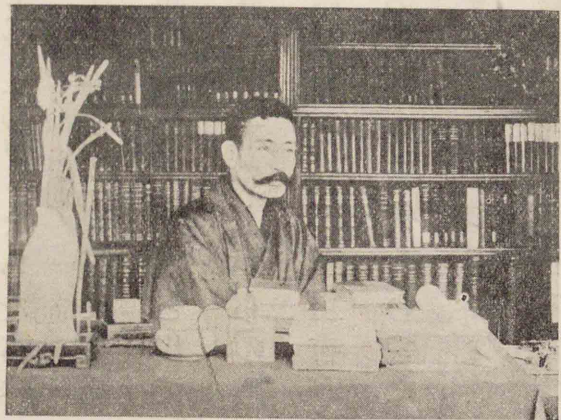
自分は已むを得ず、餌壺を持つたまゝ、手の甲で籠の戸をそろりと上へ押上げた。同時に左の手で開いた口をすぐ塞いだ。鳥はちよつと振返つた。さうして、ちゝと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の處置に窮した。人の隙を窺つて逃げるやうな鳥とも見えないので、何となく氣の毒になつた。三重吉はわるい事を教へた。大きな手をそろゝ籠の中へ入れた。すると、文鳥は急に

羽ばたきを始めた。細く削つた竹の目から暖かい「むく毛」が白く飛ぶほどに翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭になつた。栗の壺と水の壺とを留り木の間に漸く置くや否や、手を引込ませた。籠の戸ははらりと自然に落ちた。文鳥は留り木の上に戻つた。白い首を半ば横に向けて、籠の外にある自分を見上げた。それから、曲げた首を眞直にして、足の下にある栗と水とを眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行つた。



鳥 文

其の頃は、日課として小説を書いてゐる時分であつた。飯



石 漱 目 夏 の 齋 書

と飯との間は大抵机に向つて筆を握つてゐた。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞くことが出来た。伽藍のやうな書齋は、誰も這入つて来ない習慣であつた。筆の音に寂しさといふ意味を感じた朝も晝も晩もあつた。併し、時は此の筆の音がぴたりと止む、又止めねばならぬ折もあつた。其の時は指の股に筆を挟んだまゝ、手の平へ顎を載

せて、硝子越に吹き荒れた庭を眺めるのが癖であつた。それが濟むと、載せた顎を一應撮んで見る。それでも筆と紙とが一緒にならない時は、撮んだ顎を二本の指で伸して見る。すると、縁側で文鳥が忽ち千代々と二聲鳴いた。筆を閣いて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いたまま、留り木の上から、のめりさうに白い胸を突出して、高く千代といつた。三重吉が聞いたら、嘸喜ぶだらうと思ふ程な、いゝ聲で千代といつた。三重吉は、今に慣れると千代と鳴きますよ、きつと鳴きますよ、と受合つて歸つて行つたが、成程その言ふ通りであつた。

自分は又籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨らんだ首を二三度縦横に向け直した。やがて一かたまりの白いからだ、ぼいと留り木の上を抜け出した。と思ふと、綺麗な足の爪が半分ほど餌壺の縁から後へ出た。小指を懸けてもすぐ引つくりかへりさうな餌壺は、釣鐘のやうに静かである。流石に文鳥は軽いものだ。何だか淡雪の精のやうな氣がした。

文鳥は、つと嘴を餌壺の真中に落した。さうして二三度左右に振つた。綺麗にならして入れてあつた粟が、はらりと籠の底に零れた。文鳥は嘴を上げた。咽喉のところ、微かな音がする。又嘴を粟の真中に落す。又微かな音がする。その音が面白い。静かに聞いてゐると、圓くて、細や

かで、しかも非常に速かである。莖ほどな小さい人が、黄金の槌で瑪瑙の基石でもつゞけざまに敲いてゐるやうな氣がする。

嘴の色を見ると、紫を薄くまぜた紅のやうである。其の紅が次第に流れて、粟をつゞく口先のあたりは白い。象牙を半透明にした白さである。此の嘴が粟の中へはひる時は非常に早い。左右に振りまく粟の珠も非常に軽さうだ。

文鳥は身を逆さまにしないばかりに、尖つた嘴を黄いろい粒の中にさしこんでは、膨らんだ首を惜氣もなく右左へ振る。籠の底に飛び散る粟の数は幾粒だか分らない。それでも餌壺だけは、寂然として靜かである、重いものである。

餌壺の直径は一寸五分ほどだと思ふ。自分はそつと書齋へ歸つて、寂しくペンを紙の上に走らしてゐた。縁側では文鳥がちゝと鳴く。折々は千代々々とも鳴く。外では木枯が吹いてゐる。(文鳥)

六。兜 蟲

吉村冬彦

吉村冬彦
 本名寺田寅彦
 物理學者
 理學博士
 東京帝國大學教授
 明治十一年高知縣生

まだ小學校に通つた頃、昆蟲を集めることが友達仲間ではやつた。自分も母にねだつて、蚊帳の破れたので捕蟲網を作つて貰つて、土用の日盛にも恐れず、これを肩にかけて、毎日のやうに蟲捕に出かけた。蝶や蛾や甲蟲類の一番澤山に棲んでゐる城山の中をあちこちと、永い日を暮した。二

の丸三の丸の草原には、珍しい蝶や、ばつたが夥しい。少し
 茂みに入ると、樹木の幹にさまざまの甲蟲が見つかる。玉
 蟲こがね蟲米搗蟲の種類がかずくゝゐた。強い草木の香
 にむせながら、胸を躍らせながら、こんな蟲をねらつて歩い
 た。捕つて來た蟲は熱湯や樟腦で殺して、菓子折の標本箱
 へ綺麗に並べた。さうして、此の箱の數の増すのが樂みで
 あつた。蟲捕から歸つて來ると、からだは汗を浴びたやう
 になり、顔は火の様であつた。「どうしてあんなに蟲好きで
 あつたらう」と、母が今でも昔話の一つに數へる。年を経て、
 色々な面白い事にも出あつたが、あの頃珍しい蟲を見付け
 て捕へた時の様を鋭い喜は稀である。

今でも城山の奥の茂みに蒸された朽木の香を思ひ出すこ
 とが出来るのである。いつか城山のずつと裾のお濠に臨
 んだ暗い茂みにはひつたら、一株の大きな常山木トクニがあつて、



桃色がかつた花が梢を一面に蔽
 うてゐた。散つた花は風に吹か
 山れて、汀に朽沈んだ泥船に美しく
 木ちらばつてゐた。此の樹の幹に
 は處々蟲の食ひ入つた穴があつ

た。穴の中には細い木屑が蟲の糞と共に零れかゝつて、一
 種の臭氣が鼻を襲うた。樹の幹の高い處に、大きな見事な
 兜蟲がいかめしい角を立て、とまつてゐるのを見附けた

時は嬉しかつた。自分の標本箱にはまだ兜蟲のよいのが一つもなかつたので、胸を轟かして網を上げた。少し網が届きかねたが、やうく首尾よく捕れたので、腰につけてゐた蟲籠に急いで入れて、包み切れぬ喜をいだいて森を出た。三の丸の石段の下まで来ると、向ふから美しい蝙蝠傘をさした女が、子供の手を引いて樹陰を傳ひく来るのに逢つた。町の良い家の妻女であつたらう。傘を持つた手に薬瓶をさげて、片手に子供の手を引いて来る。子供は大きな新しい麥藁帽の紐を可愛



蟲 兜

い顔にかけて、眞白な洋服の様なものを着てゐた。自分の提げてゐた蟲籠を見附けると、母親の手を離れて覗きに來たが、眼を圓くして母親の方へ駈けて行つた。そして、袖をぐいぐい引つぱつて居ると思ふと、又蟲籠を覗きに來た。母親が「早くお出でよ」と呼ぶけれども、なかく自分の側を離れぬ。強ひて連れて行かうとすると、道の眞中にしやがんでしまつて、たうとう泣出した。母親も途方にくれながら叱つてゐる。自分は其の時蟲籠の蓋を開けて兜蟲を出し、道端の相撲取草を一本抜いて、蟲の角をしつかり縛つた。そして、「さあ」といつて子供に渡した。子供は泣きやんで、きまりの悪いやうに嬉しい顔をする。母親は驚いて子

供を叱りながらも禮をいつた。自分は何だか極りが悪く
なつたから、黙つて空になつた蟲籠を打振りくゞ駈出した
が、嬉しいやうな、惜しいやうな、嘗て覺えない氣持がした。
其の後度々同じ常山木の下へも行つたが、あの時のやうな
見事を兜蟲はもう見つからなかつた。又あの時の母子に
も再び逢はなかつた。 (藪柑子集)

保津川

桂川の上流

丹波國南桑田郡

龜岡町から山城

國葛野郡嵯峨町

に出る山谷二里

の間の急流

徳富健次郎

號は蘆花

文學者

熊本縣水俣町生

昭和二年歿

年六十

七 保津川下り

徳富健次郎

午後二時近く龜岡で下車。いよゝゝ保津川を下るべく、す
ぐ車で保津の乗船場に赴く。幸にも夜來の雨は止んで、時
雨を含んだ雲の間から折々薄日を漏らしてゐる。やがて

川端の乗船場に來た。水面半町餘さゝ濁つた保津川が瀬
の音を立てつゝ、さつくと奔つてゐる。それを前に、小さ
な家が二三軒、自菴樹の老木が二本、乾からびた葉を寒い川
風に鳴らしてゐる。下手に橋がかゝつて、向ふには山に倚
つて高低した村がある。保津村であらう。丹波の山國も
このあたりは打開けて、美しく色づいた山々が長閑に眼界
を造つてゐる。乗船切符賣場で切符を買ひ、舟の支度の整
ふ間茶店に憩ふ。丹波名物の桑酒、酒は飲まぬが瓢形の容
器の面白さに一つ手頃なのを買ひ、舟中の料にとて、大きな
柿など買ふ。
用意が出来たとの知らせに、一同橋の下手に下りて川舟に

乗込む。兩舷の高い薄板の舟である。皆は薄縁の上に敷いた赤毛布に坐り、余は椅子に腰をかけた。船頭は前後に各一人、中程に一人、皆頰冠して草鞋ばき、前後は棹と櫂とで舵をとり、中のは櫂で漕ぐ。

橋杭に繋がれた纜が解かるゝを待ちかねて、舟はするゝと流れ出した。夜來の雨に水が増して、流はなかく急である。乗船場の茶屋も保津村も見るゝあとじさつて行く。忽ちくの字に川は大曲りする。勢に乗つて下つた舟は突きかける様にして、ばたりと東の崖下に止つた。深さうな水が小さな渦や色々の波文を縮らしてゐる。地藏淵といふさうな。と見ると、人家の巢くふ高い崖の上から、電

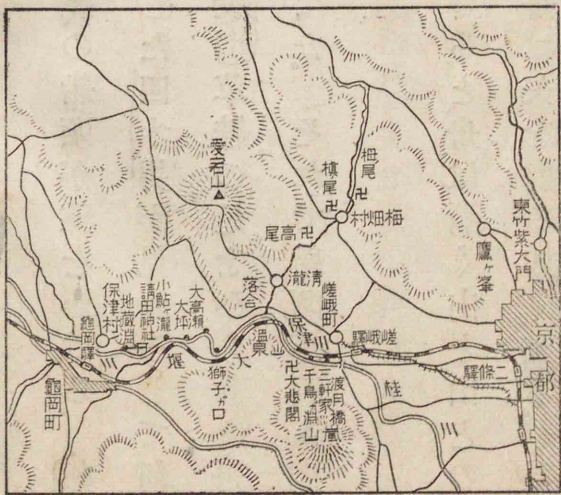
光形の嶮しい坂を、頰冠して腰蓑を着け、櫂を肩に、辨當箱ぶら下げた男が下りて来る。

「忠兵衛さん」と舟の中から前舵の船頭が聲をかける。頰冠の中から薄ら髭のにこゝした四十男が見おろして、何かいふ。忠兵衛さんはやがて股引草鞋の足をひらりと舟に乗込んで、中程の座に櫂を立てた。それで船頭が四人揃つたのである。

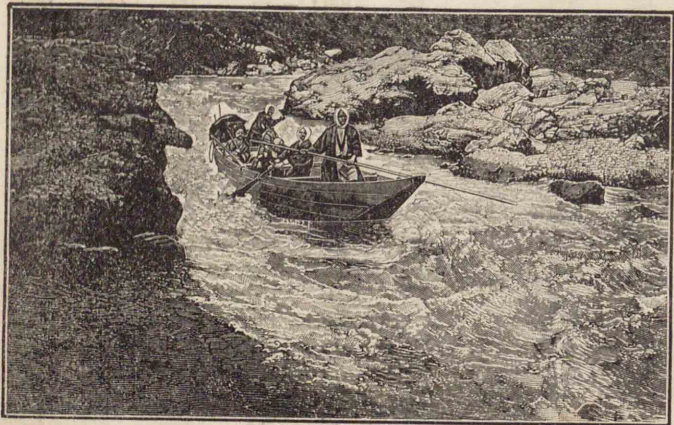
南丹波の打開けた谷が後じさると、舟は漸く山と山との峽に入つた。流が急になる。舟は矢を射る如く駛る。長い棹を取つた一人は船首に眼をくばり、一人は船尾に舵をとる、忠兵衛さん外一名は中間に兩舷に分れて、始終櫂で漕ぐ。

併し漕ぐ必要はない程舟脚は疾い。夜來の雨は保津川を膨らして、好奇の客に酬待以上の壯快を味はせるのであつた。東の崖上にある請田神社の祠を彼よくと指さし過ぎて、小鮎が瀧大坪大高瀬獅子が口と段々面白くなつて行く。

峽は愈狭くなつて、水は苛ちに苛ち出した。大きな岩を衝き、小さな岩を跳り越え、白泡立て、勢猛に跑けていく。其の水に、さも無邪氣にふわ



近附川津保



保津川下り

りと舟は乗つて、つるくするく〜と無造作に飛んで行く。面白さうに飛んで行く。椅子にかけて見てみると、緩勾配の瀑布をのべつに連ねたやうな水の坂が行手に見える。ぶつかつたら舟を微塵に碎くにきまつてゐるやうな岩が真中のさばり返つてゐる。水と水とこぐらかつて泡を噛んで、真白にたぎり立つてゐる處がある。ひやりとする。何處をどうして通つて行くかと心配

する。船頭騒がず、舟は何處までも無邪氣に、つと其の勢に乗つて、ささ、さつと逆落しに、迂りおりる。滑らかなものだ。少しのあぶなげもない。そんな平凡な處だつたかとおるかへつて見ると、今過ぎた瀬は、後に白い階段を押立てゝゐる。よくもあんな處を無事に下つて來たものだと思ふ。

兩岸の山々は程よく色づき、杉や松の翠と美しい色の配合を見せて、舟を迎へては送るのである。忽ち峽の内が小暗くなつた。さあ、と時雨が降つて來た。傘さす暇もないので、赤毛布を打ちかぶつた。色づく山から斜に落來る筋を見せて、さと川瀬を撲つ時雨の面白さ。降れ、もつと降れ。と嘩す間に、搔消す如く時雨は過ぎた。舟はもう三里も下つ

球磨川

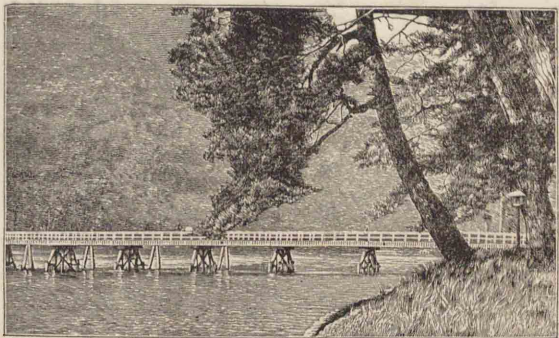
熊本縣五家庄の
山中に發し八代
海に入る
日本三急流の一

清瀧川

京都府葛野郡棧
敷岳に發し愛宕
山の東麓をめぐ
つて大堰川に入
る

て、丹波から山城に入つて走つてゐるのである。柔かな京の附近にこんな壯快が潜んでゐるのは不思議といつてよい。肥後の球磨川に果さなかつた川下りの遺憾は、こゝで償はれた。一行は段々危険に馴れて、何でもかても瀬瀬、瀬瀬でなければ面白くなかつた。少し水勢のんびりして忠兵衛さんの櫂の漕ぎばえがする様な處へ來ると、いひ合せた様にあくびが出る。ごろくくといふ響に頭を上げると西の崖の上高く汽車が走つてゐる。おひおひ瀬が稀に、流が緩くなつた。もう嵐山も遠くあるまゝと思ふと、舟路の短いのが惜しくてならぬ。やがて清瀧川の落合に來た。細い川が東から落ちて來る。

高尾 高尾村にある山
 高尾 共に葛野郡梅畑村にある山
 高尾 合せて三尾山といふ
 紅葉の勝地
 大悲閣 嵐山の西北方中腹にある寺
 本尊は千手觀音
 三軒家 天龍寺の南
 渡月橋の上流 旗亭などある處
 渡月橋 嵯峨から嵐山に通ずる橋



渡月橋

兩崖から差出た支柱で支へた木橋が架つてゐる。小さな路が山を上つてゐる。此處でよく寫眞を撮らば「まつせ」と船頭の一人在いふ。余も寫眞師の眞似をする。此の川は高尾、梅尾、槇尾の紅葉を浮べ、清瀧の里を過ぎて流れて來る。此處を東北に溯ると、清瀧に出的のだ。鐵橋を潜つて大悲閣の下を過ぎ、千鳥が淵を通つて嵐山三軒家の下に舟は着いた。今夜は泊つて、明朝舟を曳いて保津へ歸るといふ船頭たちを頼つて、舟から上る。渡月橋に近

い茶屋に腰をかけて、茶を飲み餅を喫しつゝ、つくどくと嵐山を眺める。

日は既に入つたが、黄昏近い薄明に、もう五六分染つた嵐山の明るさが、空にも水にも映つてゐる。柔かな線、落着いた色彩のどうしても晝である山の美しさよ。其の明るさを流しもあへず、永久に沿うて流るゝもとの保津川、今は名を變へて大堰川、またの名桂川の美しさよ。此の水、此の山、京ならではの所詮得られぬ。

死の蔭にはよしの人が作
 つかか(徳富健次郎)

正岡子規

正岡子規 名は常規
 俳人 歌人
 愛媛縣松山市生
 明治三十五年歿
 年三十六

八果物

果物ほど味の高く清きものはあらじ。小兒もこれを好み、

仙人もこれを食ふとか。青梅は酸くして口を絞れども、鹽
少しばかりつけんには、味言ひがたし。杏は乾からびて賤

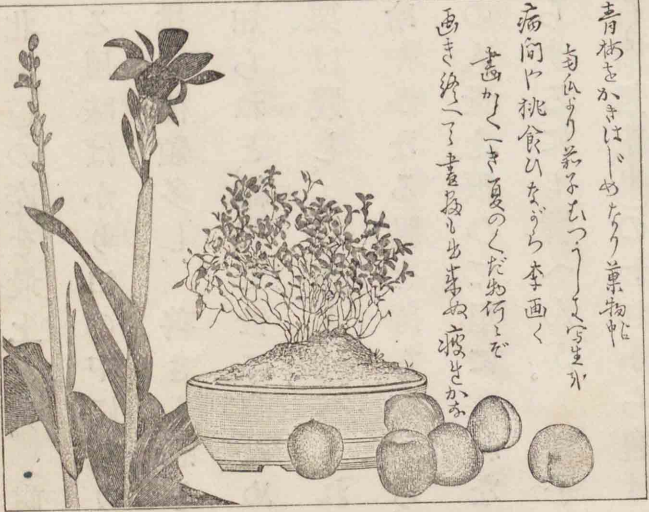


正岡規子(中村不折寫)

の下には、はしなく見つけて取りて食ひたる、味は問はず、時に
取りていと嬉し。
枇杷はうまけれど、種子大きく肉少なきは飽かぬ心地す。

しく、李は水多くしてあ
さはかなり。苺は西洋
苺を良しとす。されど
行脚の足草臥れて草鞋
の緩みたる頃、岩の角に
腰打据ゑて汗を拭ふ手

桑の實はなべての人に知られねども、果物の中、これを外に



五月梅をかきは、めなり菓物帖
上旬瓜より茄子む
つかしき寫生哉
病間や桃食ひな
がら李畫く
畫かくへき夏の
くだ物何々ぞ
畫き終へて晝寢
も出来ぬ疲れか
な

を入れて、柱に倚り、襟を披き、片手にて團扇を持ちながら一

して甘きものはなむ。晝餉
だにした、めずに貪りたる
木曾の旅の思ひ出でられて、
懐かし。夏蜜柑、ザボンの類、
俗を離れて涼し。さして良
しとにはあらねど、少し病み
て飯だにえたうべぬ時など、
またなきものとぞ覺ゆる。
梨は涼しく潔し。南窓に風

筆蹟

青梅をかきは、めなり菓物帖
上旬瓜より茄子む
つかしき寫生哉
病間や桃食ひな
がら李畫く
畫かくへき夏の
くだ物何々ぞ
畫き終へて晝寢
も出来ぬ疲れか
な

王母
西王母
三千年に一たび
實のる桃を漢の
武帝にすゝめた
といふ仙女

片を口にしたる、氷にも優りてすがくしうこそ。林檎は
北海道の産を最上とす。齒にさはれば形消えて、涼やかな
る風味ばかり口の中に残りたる、仙人の薬にも似たらんか。
桃は種類多し。善きも悪しきもあり。王母後園の風味は
知らねど、總べて世に詔はぬところに一段高き趣あり。
栗は賤し。甘藷と較べられたるも口惜し。柿は野氣多く、
冷やかなる腸を持ちながら、味はいと艶やかなり。多血性
の人、世を厭ひて里に隠れながら、なほ物に觸れて熱血を迸
らするにも譬へんか。柚子は氣高けれど食ふべからず。
石榴・無花果のわれから裂けたるは食ひ劣りぞする。葡萄
は甘からず、澁からず、人に媚びず、さりとして世に負かず君子

の風あり。

我、この夏頃よりわけて果物を貪り、物書かんとすれば、必ず
これを食ふ。書きさして倦めば、またこれを食ふ。食へば
則ち心涼しく、氣勇む。氣勇めば則ち想涌き、筆飛ぶ。我、力
を果物に借ること多し。

日毎々々十顆の梨を食ひけり。

柿食うて洪水の詩を草しけり。子規全集

九 柿二つ

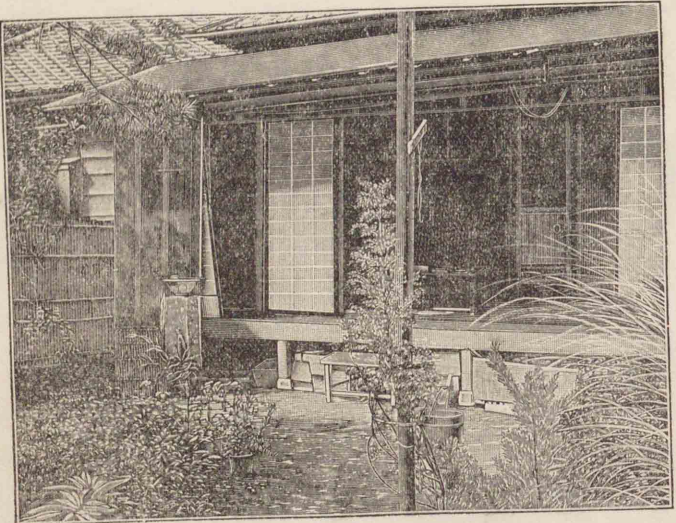
高濱 虚子

ランプの光は靜かに更けて行つた。時々上野の森に反響
して轟き過ぐる汽車の音があるばかりで、根岸の夜は沈ん

高濱虚子
名は清
俳人
明治七年愛媛縣
松山市生
ランプ
Lamp 石油燈
上野の森
東京下谷區上野
公園の森
根岸
上野公園の北の
麓にある地
正岡子規の住宅
はこゝにあつた

彼
正岡子規

だやうに寂さびしかつた。
 日によつて不定ではあるけれども、此の頃は一體に彼の熱
 は夜に入つて下ることが多かつた。夜中頃から再び上る
 のではあるが、其の平熱になつた時の心持は、流石にすがす
 がしかつた。病主人の頭はさういふ時に一層透明になる
 のであつた。彼は自分を神かと疑うたがふばかりの明快な判断
 を數かぎりない句の上に下すことが出来た。句の良否は
 色の黑白の如く明白に、一見して立ちどころに判断するこ
 とが出来た。自分で自分を怪あやしむ位に、それが容易に直ただ速すみ
 であつた。
 彼の寂しい家庭には、六十を過ぎた老母と今年二十七にな



ぶためであつた。

九 柿二つ

つてまだ嫁よめがない妹とがあるばかりであつた。老いたる
 母も嫁期よめどきを失した妹も、唯主
 人の病を看とるために生き
 てゐた。二人は次の室の暗
 いランプの下で、病室の物音
 規規に耳を敲たたてながら、各黙つて
 針を運んでゐた。
 庵庵やがて妹は膝の絲屑イトクズを拂つ
 て立上つた。それは病主人
 の枕許まくらごころに、盆ハシに載せた柿カキを運

「もうこれきりかい」と彼はながし目に其の盆の柿を見ながら聞いた。

「昨日あんなにお食べたから、もうこれきりよ」と妹は答へた。盆の上にはたゞ二つしかのつてゐなかつた。

彼は總べてのものに「健啖」である中に、殊に果物を好んで食うた。中にも柿は飽くことを知らなかつた。

彼は忽ち食指が動いたのだが、たゞ二つの柿を今食つてしまふことは心細かつた。それは是非とも今日の大事業――

投書函の「掃」が完了した時の「慰藉」の料に取つて置かねばならなかつた。彼は心のうちで呟いた。

「選がすんでしまつたら、此の柿を御褒美に遣るよ。今一息

投書函
子規は當時日本新聞の「日本俳句」の選者をしてゐた

だ。たゆまずに片附けてしまへ」と。斯くて漸く底の見えて來た句稿の選に、更に一心不亂に取掛つた。

燈火は主人の心を知るかのやうに、瞬きもせず「牙え渡」つた。

老いたる母が寢床にはひつたことも、彼は知らぬではなかつたが、其等は餘り深く彼の注意を惹かなかつた。妹が床

にはひつたのはそれから一時間も後であつたが、それは其の物音が兄の仕事の妨にならぬやうに、いつふせつたとも

分らぬ位ひそやかであつた。

静かな沈んだ夜の呼吸が聞えた。彼の目は燈火に光り輝いて、此の夜の色の中にひとり帝王のやうな威を示してゐ

た。

最後に手に當つた草稿を見終つた後、彼は念のため投書函をかき探して見たが、もう其處には一枚も留めなかつた。彼は朱筆を投げ棄てたまゝ、両手で頭を抱へて暫く身動きもしなかつた。

久しく心に掛つてゐた仕事を片付けてしまつた慄へるやうな満足的情と、病軀に不相應な努力のあとに來る疲勞の恐とで、彼の心は暫く搔亂されてゐた。が、やがて其の頭を抱へてゐた手をほどいて蒲團の外に現した彼の顔は、いよいよ興奮して、蒼白い皮膚の中にも、頬のあたりの赤みは色を増してゐた。

もう時計は二時を過ぎてゐたが、彼は少しも睡いとは思は

病床六尺

子規は當時永い病の床に横たはりつゝ「病床六尺」と題して毎日日本新聞へ日記やうの隨筆を出してゐた

愚庵
俗名天田五郎
明治三十七年寂
年五十一

なかつた。燈火を中心とした此の「病床六尺」の天地は、今は何者にも煩はされることのない、極めて自由な、希望に充ちた世界の様に思はれた。今や彼の體温は再び上つて、其の爲にいつもの酒に酔つた様な興奮した心持になつてゐるのであるといふ事には氣がつかうともしなかつた。

彼は煩はしげに盆の上の柿を見やつた。柿の赤い色は媚びる様に輝いてゐた。抑へてゐた彼の食欲は猛然として振ひ起つた。彼は餓ゑた虎が殘忍な眼を光らせて兎を擱む様に、忽ち其の柿の一つを取上げて、皮をむき始めた。

此の柿は、京都伏見の桃山に庵を結んでゐる愚庵といふ禪僧から贈つて來た釣鐘といふ珍しい名の柿であつた。さ

天龍寺
京都府葛野郡嵯峨町にある臨濟宗の巨刹
京都五山の一
峨山和尚
俗名橋本昌禎
天龍寺派管長
明治三十三年寂
年四十九

ういへば形がどこか釣鐘に似てゐた。此の禪僧といふのは、維新の戦亂に母と妹とが生死不明になつてしまつた其の行方を何十年かの間探したが、遂に見當らなかつたことが動機となつて、中年から天龍寺の峨山和尚の鉗錘の下に僧となつた人であつた。主人は既に數年前から交遊があつたのであるが、此の禪僧も主人と同じく肺を病んでゐる上に、萬葉調の歌をよくし、又書に巧であつた。俳句はやらなかつたが、其等の關係から互に推重して、何かにつけて贈答を怠らなかつたのであつた。今度の柿は、桃山草庵に禪僧を訪ねた人が、其の庭前の柿を託されて、遙々と携へて歸つて病床に齎したものであつた。

それは昨日の事であつた。其の人がまだ枕頭にある間に、彼はもう辛抱が出来なくなつて、其の柿を三つ續けざまに食つた。其の人が歸つた後も、夜寐る迄に十ばかり平げた。今夜枕頭に運ばれたものは其の残りのたゞ二つであつた。彼は其の一つを取つて、其の皮をむくより早く、忽ちそれに武者振りついたのであつたが、もう大方食盡して蒂の所に達したとき、少し顔を擡めた。それは稍、澁かつたのであつた。さういへば、昨日食つたのも大方は少しづつ澁かつたのであつた。けれども彼はそれに頓着せず、其の蒂の所の際まで少しも残さずに食つてしまつた。

三千の俳句を閲し、柿二つ。

當用日記
書肆博文館から
發行する日記

當用日記に、彼は毎日の出來事を句にして十句宛書くことを日課にしてゐた。明日になつて今日の部を認める時に忘れぬやうに此の句を加へねばならぬと思つた。疲勞が一時に出て來るやうに思はれて、頭がぐらくした。彼は始めて熱の高いことを覺えたのであつた。

柳澤淇園

一〇 寓言二則

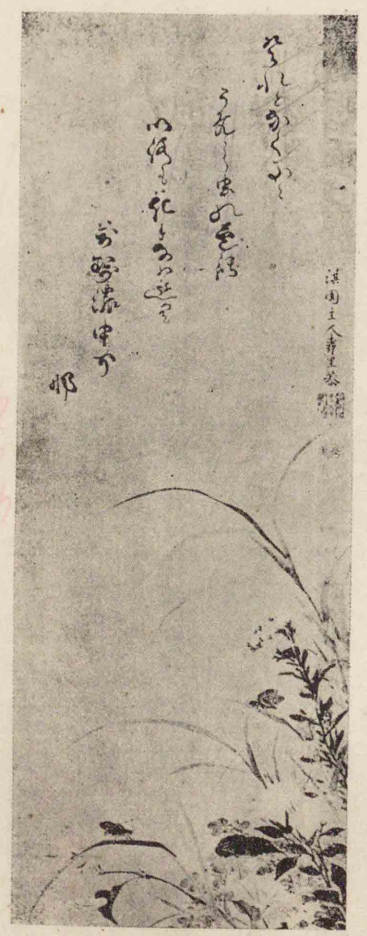
一 かんにん

柳澤淇園

或人文盲なるものを意見して、「世の交は他の事はいらす、ただ堪忍の二字をよく守るべし」といふ。文盲の人首を傾け、「かんにんとは四字にて侍らずや」と指にて數へ、「御許にはお

柳澤淇園
名は里恭
大和國郡山藩の
老臣
文武の才に富み
兼ねて書畫をよ
くした
寶曆八年(四二八)
歿
年五十三

ぼし違ひなるべし。かんにんの四字にて侍り」といふ。意見したる人「愚昧の人かな。堪忍とはたへしのぶと書きて二字なり」といへば、また首傾け、「たへしのぶならば、又一字殖



秋草 (柳澤淇園筆)

筆蹟
淇園主人柳里
恭
それとなくき
そめし蟲の聲の
いろも花になり
ゆくませの中か
な

えたり。五字となりぬべし。何と仰ありとも、我等は四字と思ひ侍れば、四字にてかんにんは致し侍るなり」といふ。かの意見したる人大いに憤りて、「汝が如き愚昧のものは實

に諭しがたし。人に似て蟲同様なり。己がまゝにすべし。といひければ、**文盲**の人笑ひて、何とも仰あるべし。我等はかんにんの四字を知り侍れば、悪口せられても、少しも腹立ち侍らざるなり。とて笑ひみたりきとぞ。雲萍雜誌

二 愚公の山

室 鳩 巢

諸君**列子**の著書を見給へりや。「愚公といふ人ありけるが、家居近く山のあるを厭ひて、よそへ移さんとて、日々に子供引具し、手づから耒耜を執りて一簣づつ**毀ち取りける**を、智叟といふ人これを見て、「かく大いなる山を僅かなる人の力にて毀たばとて毀ち盡さるべきか」と、その愚かさを笑ひければ、愚公聞きて、「わが代より毀ちそめて、わが子の代にも繼

室鳩巢
名は直清
江戸時代の儒者
享保十九年(三元
巳)歿
年七十七
列子
名は禦寇
支那周代の學者

ぎて毀ち、わが孫の代にも、亦その子の代にも繼ぎて毀ちなば、終に移されざることやはあるべき」といへば、愈、笑ひけり。となん記し置かれける。



およそ天下の事、愚公が如くな
室らば、遅くとも一たびは成就す
鳩べし。然るに世に智ありと稱
巢するほどの人は、おほかた智叟
が心にて、愚公が山を移すやう

のことを聞きては、その愚を笑ふほどに、何事もその功を成
就せぬなるべし。されば、世のいはゆる愚は反りて智なり、
世のいはゆる智は反りて愚なり。それゆゑに、禦寇が世を

諷してこそかくはいひつらめ。(駿臺雜話)

五十嵐力

一一 鳥飼藏人

五十嵐 力

國文學者
文學博士
早稻田大學教授
明治七年山形縣
米澤市生

白河
福島縣西白河郡
白河町

奥州の白河に鳥飼藏人といふ弓射の名人があつた。或日諸國行脚の老僧が訪ねて来て、御主人に御目にかゝりたいと言つた。藏人はすぐに逢つた。老僧は懇懇に挨拶して、拙僧は御高名を慕つて遠國から參つたものでござる。近頃不躰なる御願ながら生涯の思出に、貴殿の御射術を拜見させて戴きたうござるが、叶ひますまいか。と頼み入れた。藏人は快く承諾し、やがて老僧を誘つて弓場に立つた。藏人の顔には誇の色が見えた。

「では、拙い藝を御覽下さい。」

と言つて、弓を取つて矢を番へた同時に茶碗になみくと水をついで左の臂に載せた。第一矢を放つたと見る中に、二の矢が継ぎ、三の矢が継ぎ、四の矢、五の矢、六の矢、七の矢が

筆蹟
むきの浪に身は
かくろひてうけ
るかこと馬子の
かさゆくうまの
首ゆく
甲鳥飼主人
花押

筆蹟
かろひてうけ
るかこと馬子の
かさゆくうまの
首ゆく
甲鳥飼主人
花押

十五嵐力筆蹟

繼いだ。前の矢の筈に後の鏃が相接して、數本の矢がたゞもう一本のやうである。そして此の瞬く隙もなき働きの中に在つて、藏人の身體は造り据ゑた石像のやうに泰然として、臂の上の茶碗の水にはさゝ浪だに立たなかつた。一

一の矢が的の正鵠を射たことはいふまでもない。

老僧は感嘆して「あゝ」と言つたが、やがてつぶやいて、

「しかし、まだ弓射の弓だ。神神心に入つた技白くではない。」

と言つた。藏人は聞きとがめて、

「御僧、何とおつしやりました。」

と尋ねた。老僧は、

「いや、詞で御答は出来ませぬ。拙僧と一緒に山へ御出で

下さい。」

と言つて先に立つた。藏人は弓矢を携へて従つた。

二人は遂に高い山の絶壁に攀登登つた。断崖は一面に苔む

して、上には矛形の峯の面を白雲が去來し、下には千仞の淵

が泡を立て、渦を卷いてゐる。そして、足がかりの岩角は辛うじて爪先を託するに足るだけである。

老僧は先に立つて、悠然として藏人をさし兼ねいた。見れば、藏人は色が青ざめ、足がふるひ、そして、冷汗は衣をしぼつ

て、踵まで沾してゐる。老僧は言つた。

「足懸りは此の通りの通りの大磐石で、向ふには松が枝に鳶が止つてゐて、無類の的でござる。さ、御弓勢を御示し下さい。」

藏人は答へなかつた。老僧は言葉をついだ。

「藝に至つた者は、我を去り天地に同じて、どのやうな高い山、深い淵に臨まうとも、神氣の變るものではない。然るに御事は、前には誇る色があり、そして、今はおどくして

みられるではないか。まだ一御奮發を要しませうぞ。
藏人は我慢の夢を覺まして再び懸命の修行をした、そして遂に驕ることなく恐るゝことなき至上の達人となつた。

(甲鳥園隨筆)

櫻井忠温

陸軍歩兵大佐

日露戰役に負傷

して片腕を失つ

た

明治十二年愛媛

縣生

二十七日

明治三十七年七

月

一二 戦場の今昔

最後の肉弾

櫻井忠温

明くれば二十七日、旅團長より次の命令が下つた。

前日來ノ將卒ノ勇敢ナル動作ヲ嘆賞ス。旅團ハ本日午後五時ヨリ太白山東方一帯ノ敵ヲ攻撃スル爲、全砲兵ヲ以テ砲撃ヲ加へ、左翼隊ハ砲撃ノ熟スルヲ待ツテ前進シ、

敵ヲ攻略セントス。其ノ聯隊ハ此ノ好機ヲ逸セズ、死力ヲ竭シテ當面ノ敵陣ヲ占領スベシ。

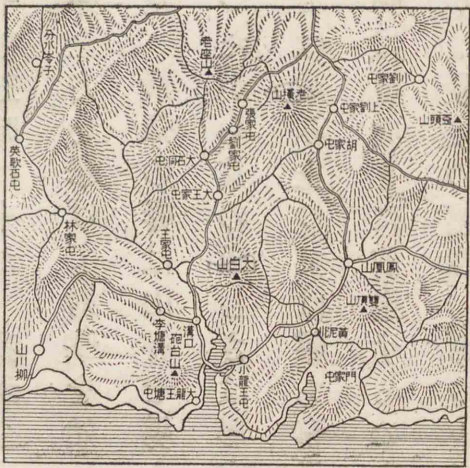
午後五時は來た。我が全砲兵は一齊に砲門を開き、歩兵も亦全力を擧げて射撃を始めた。天地は忽ち硝煙に鎖された。飛彈の響は山谷を劈かんばかり。今度のは決戦であつたから、其の激しさは形容の語がない。我が歩兵は撃つては進み、止つては撃ち、奮進又奮進。されど霰と落來る敵弾は眞向きに前進するのを沮む。「小隊長殿」とかすかに響くは最後の感謝。「あつ」と叫ぶは三寸息絶ゆる聲。さりながら今は戦友の死を顧みるべき場合でない、一歩でも前進して敵陣に迫らねばならぬ。「旅團長閣下の命令には死力

を竭せ』とあつたぞ。たゞ進め。進んで死ぬ。今は半歩も止るべきときではないぞ』と、將校は軍刀を揮つて、戦線を彼

方に走り此方に駈けて士氣を鼓舞してゐた。豫備隊たりし一箇小隊の工兵も亦第一線へ増遣せられた。

我が第一大隊は、遂に敵前實に二十米の近くまで肉薄した。されども、前に立塞がつ

て居るのは、屏風の如き岩山で、殆ど一つの足場も無い。如何にあせつても攀登ることが出来ぬ。側面からは敵弾が



近 附 山 白 太

松丸大尉
名は淳一
太白山の戦の後
間もなく大孤山
で戦死した

ばらく飛んで来る。正面に向つた第二中隊は唯敵の機關砲の標的となるばかりで、見るくうちにばたくと不れる。一弾は松丸大尉の劍身を貫いて左眼を掠めた。而して又我が砲兵の射撃は花火のやうに空中で破裂した。このことで、敵の防禦工事に對しては、一つの効をも奏さなかつたらしい。榴霰彈では役にたゝぬ榴彈を爆發せしめて敵壘の掩蓋を碎破しなければならぬ。これが爲には我が歩兵が損害を受けても致方がないから、とにかく早く榴彈を發射してくれ』と砲兵隊へ頻に傳令を派遣したが、一人として歸つて来るものはない、皆途中で僵れてしまつた。工兵の小隊長に「爆薬を送つて來い」と命じたが、それも間に

合はなかつた。

内野少佐
名は辰二郎
其の後陸軍中將
に累進した

七時も過ぎ、八時・九時ともなつたけれど、形勢は依然として
發展せぬ。彼此する中に、夜は已に更けた。物凄き下弦の
月は淡く戰場を照して、陣地の半面を朧に露してゐた。こ
の時、左翼隊なる第二大隊長内野少佐より聯隊長にあて、
左の意味の通報が來た。

我が大隊ハ今ヨリ全滅ヲ期シテ突撃ニ移ラントス。貴
官モ共ニ攻勢ニ轉ゼラレシコトヲ希望ス。予ハコ、ニ
謹ンデ告別ノ敬意ヲ表ス。

折しもあれや、遙かに左翼の方に當つて、嘯唳たる「君が代」の
喇叭が聞えた。月影細き空を傳ひ、餘韻微かにながく曳い

松村少佐
名は安雄
その後歩兵大佐
に累進した

て、予等の胸裏に一入深く沁み渡つた。「君が代」の喇叭の聲
は恰も陛下御身親ら「前へ」と號令せらるゝかの如くに感ぜ
られて、將卒は勇氣百倍、忽ち奮躍して、彈雨を冒し、岩石を攀
ぢて猛進し、大喊聲を放ちつゝ、敵壘に突入した。眞黒に固
まつた一團の先頭に立つたる松村少佐は聲を怒らして、

「突つこめ、突つこめ。」

「君が代」の喇叭はなほ盛に起る。各隊は續いて「萬歳萬歳」を
連呼して聲援を與へた。山上には劍尖相撃つて火花を散
らし、接戦格闘、これぞ大和男兒の最後の肉弾なるぞ。傲慢
無禮の此の仇、今ぞ思ひ知れや」と打込む太刀筋に血を流す
伏屍の數知れず。慘といへば慘の至であるが、窮苦の極、始

〇はなのおかましや
十回とつげ
九

めて敵を破り得たる我等が愉快は如何ばかり。海嘯の如き一團の後からは又一團と、我は續々兵力を増加するので、敵は遂に此の猛烈なる攻撃に堪ふること能はず。時は七月二十八日午前八時、東天紅を染出したる頃、我が軍は確實に太白山一帯の高地を占領した。軍旗はひらくと陣頭に翻り、萬歳の聲は潮の如くに涌いた。(肉弾)

われもかう

私は望臺の中腹で、蛇のやうに山を巻いてゐる土壘の内側に立つた。こゝが私の戦場に於ける最後の地である。右手を打たれると、私は劍の鞘を捨て、拔身のまゝ、この土壘

今
昭和二年七月

を飛びこして望臺へ駈上つた。氣も狂つてゐたらう。

昔はこゝも石山だつたが、今來てみると、尺にも餘る草がはびこつてゐる。そして身の丈の倍もある松が、黒い枝を廣げてゐる。何だか見知らぬものが來て屋敷跡へ坐つてゐるやうな氣がせんでもなかつた。肉と血で太られるだけ太り、伸びられるだけ伸び、その幹は鑄物の如く固く、その葉は壘針の如く鋭く見えた。

この恐しい荒くれものゝ中に、なよよとした一本の松が、今にも折れさうに佇んでゐる。そしてそのそばに、實生えの小松が一本屈んでゐる。もし私の最後の地を記念する

としたら、このひよろ／＼松である。何といふ寂しい姿だらう。震へながら、おびえながら立つてゐる。私の倒れた處は、少し窪んでゐたことも知つてゐる。それがこの松の



わかれもかも

根元から下になだれてゐる。

その窪みの中に、一本のわれも

葉莢の實

のやうな花が、絲のやうな枝の

先に赤くゆれてゐる。あたり

の草の中に目をやると、ところ／＼に赤い頭を出してゐる。

それがみなわれもかうである。そして私の倒れたあとに

も、その一本が恵まれてゐる。

吾亦紅

それは古戰場に何

といふふさはしい名であらう。私は、全山血で浮いたこゝ

に、この草を見て、覺えず涙がにじむのであつた。

ある夜、私は望臺の上まで攻上つた。けれども、山の左の脊

から逆襲を受けて山をころがり落ちた。突創もあるのだ

から、その時突かれたのだらうが、何が何やら分らぬ内に、足

をやられたので、崩れるやうにそこに倒れてしまつた。そ

こが、この松のところなのである。

生きてゐるのか死んでゐるのかわからぬものが、天邊から

下までつゞいてゐた。そこへ北堡壘の方から、黒い塊がの

そつと出て來た。「逆襲！」といふ聲が起つた。やはり生き

てゐたものは、こゝへ來てゐたのであつた。その聲は人間

の叫ぶ聲ではなかつた。地獄の釜の中からでも出さうな聲であつた。今こゝに立つと、その聲が地の底から聞えるやうな氣がする。そこへ又弾がいくらかも私の體の上に落ちて來た。見上げると、望臺の上の大きな大砲がによきつとして、頭の上に「それ見ろ。」といった顔をして突出てゐた。同行の友は懷の硯を出して、墨を摺始めた。何をするのかと思つてゐたら、「何か書け。」といった。私は何か書くどころの騒ではなかつた。友の聲も、今やうやく耳に入つたのだつたかも知れなかつた。私は木のやうに立ちすくんでゐたのだから。

Duck
 ズック

友はズックの鞆の中から便箋などを出して、自分で何か書始めた。

この長い年の間、こゝにあつた石も轉げて谷へ落ちたであらう。上から上からと石が轉げ落ちて、又それが谷から谷へと落ちて行つたであらう。草も生えては枯れ、枯れては生えたであらう。風も吹き、雨も雪も降つたであらう。この間二十三年といふ年がたつた。私を見覚えてゐる石があらうか。必ずあるにちがひない。それが私の老いた姿を見て何と思ふだらう。それも丁度、この月、このごろであつた。私に最も近かつたのは、左手に抱いてゐる眼と腹とを打た

小笠原長生
子爵
宮中顧問官
海軍中將
慶應三年(三五七)
生

ルーズヴェルト

Theodore
Roosevelt
(1859—1919)

ニューヨーク

米國ニューヨーク

州ホドソ

ン河口にある

New York

大都會

オイスター灣

Oyster Bay

れた兵と、左の足もとに顔を幹竹割からたけわりに割られて生欠なまあきをして
みたが、間もなく息を引取つた兵と、左側に手を合はせて念
佛を唱へながら死んだ兵とであつた。
私は草の上にくづれるやうに坐つた。
石を起すと、中から顔がによきつと出るやうに思はれた。
石の下から、草の蔭から、私をのぞいてゐるやうに思はれた。
どこからか、隠々と私を呼ぶやうに思はれた。
(草に祈る)

一三 東郷元帥とルーズヴェルト 小笠原長生

米國前大統領ルーズヴェルトの邸宅は、ニューヨークより
東二十餘里を隔てたオイスター灣、サガモア一丘の森の中

東郷元帥
元帥海軍大將大
勳位伯爵東郷平
八郎
八月十三日
明治四十四年
マンハッタン
ニューヨーク
市の一部を成
すホドソン河
口の一島
ペンシルヴァニ
ヤ
Pennsylvania



ルーズヴェルトの邸宅と家族

に建てられた簡素な木造である。玄關を這入ると、右は書
齋、左は應接室になつてゐる。正面は板張の廣間で、少しの
裝飾もないが、彼が天統領てんりやうであつた時代には、各國大使の國書捧
呈をこゝで受けたといふ尊い由
緒つきの室である。
我が東郷元帥が同邸を訪問した
のは八月十三日である。
元帥は午前十一時四十五分、マン
ハッタンのペンシルヴァニヤ驛
より臨時列車に乘じ、午後零時四十分オイスター灣に着き、

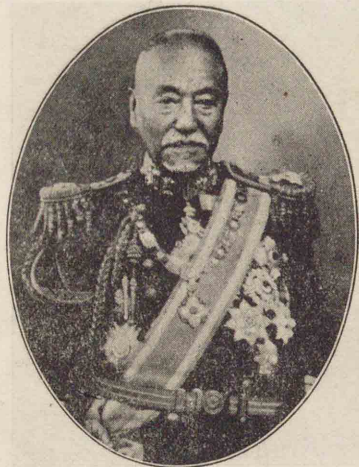
同所に待つてゐたウッドフォード少將と自動車でサガモ
 アー丘に向つた。これより先、その通知を受けてゐたルー
 ズヴェルトは、満身に溢るゝ喜悅を以て、夫人と共に、質素に
 して而も眞情の籠つた歓迎準備をしたが、今かくと元帥
 の到着を待ちかねて、遂には玄關に立出で、廣い車寄を彼方
 此方と徘徊してゐた。そこへ元帥の自動車に着いたのだ
 からたまらない、しげそに、よつておこるかんじや、うい感情を制して體裁をつくるやうなことを
 しない快傑は、元帥がおり立つが早いか、そこへ駆けよつて、
 「おゝ親愛なる東郷君、よく來て下さつた、本當によく來て
 下さつた、私はどんなに君を待つたらう。」
 といひつゝ、さも懐かしくてたまらない様子で、岩乗を左右

Christmas



Coenils hall

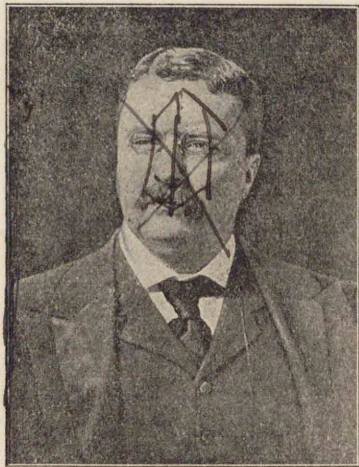
コニヤルホール



東郷元帥

の手をぬつとさし延べ、同じく右手を出した元帥の手をう
 んと握つて打振りく、「嬉しいく」と繰返した。そして元
 帥を抱へるやうにして廣いコロニヤルホールに案内した。
 そこで元帥は改めて初對面の
 東 挨拶をなし、土産として本邦よ
 り齎した金銀細工の鎧の飾物
 を箱のまゝ贈呈した。すると
 ルーズヴェルトは、ちやうどク
 リスマスの贈物の包をあける時のやうな熱心を以て箱を
 あけ、鎧を取出すや否や、
 「おゝ、綺麗。」

と叫んで、飽かず見入つてゐたが、元帥よりその説明をきくと、例の「嬉しい〜」を連發し、すぐにそれを飾棚に置き、再び元帥の腕を抱へ込んで應接室に導き、夫人に紹介した。



トルエヴズール

やがて元帥一行は、主人夫妻の心を籠めた午餐の饗應に與つた。食事が終ると、主客共に打ちくつろいで、或は戦争談に、或は名勝談に、それからそれへと話は盡きず、一座の興はいつ果つべしとも見えなかつた。そのうちに、ルーズヴェルトは、つと立上つて、一口の太刀を捧げつゝ座に戻り、襟を正して元帥に向ひ、

「これは貴國の天皇陛下より贈られたもので、余が家の第一の寶でござる。」

といつて恭しく元帥の手に渡した。

ルーズヴェルトは壯年時代より深く明治天皇を尊崇し、天皇の御治績を始め、苟も天皇に關し奉ることは細大となくこれを記憶し、天皇こそは、眞に世界第一の偉人に在すと、日頃深甚の敬意を捧げてゐた。従つて、此の太刀を、彼は決して一の武器と視ることなく、これから偉大な教訓を感受してゐる様子であつた。さて、**謹嚴**な元帥は、両手で恭しく之を受けて押戴き、引抜いてじつと見入ると、**細**かに**句**深々、處々に**稻妻**閃いて、**地鐵**は青く澄み、**天晴**の業物と見受けら

れた。只或處に油が凝結してゐたのでその旨を主人に語り、私が手入して進ぜよう。」と附けて贈られた打粉を打ち、拭をかけて、油をひき直し、靜かに鞆に收めて返上した上、懇切にその保存法を傳授した。ルーズヴェルトは「有難う〜。」と繰返して、深くその好意を謝し、續いて日本における武士道と刀劍との關係について種々質問した。元帥は之に應じてその歴史の大要を物語つた。

當時、通譯として元帥に隨行してゐた水野總領事は、その後或人に、兩雄の會談についてこんな話をした。

「午餐前に、ルーズヴェルトは、その書齋の壁に懸けてある色々の記念物について元帥に説明したが、食後暫くその

水野總領事

名は幸吉
支那公使館參事
官に累進した
兵庫縣洲本町生
大正三年歿
年四十二

席を離れた際、夫人は元帥に向ひ、同じく壁間に掲げてある小旗を指し、ほゝゑみながら、「ルーズヴェルトはこの旗について何か申し上げましたか。」と問うた。元帥は、「いやまだ承りませんが、何か由緒でもございますか。」と尋ねた。すると、夫人はつゝまじやかに、「實は、この旗はルーズヴェルトが初陣の時、敵から奪つた大隊旗なので、何時も得意になつてお客様にお話するのでございますが、大方閣下の御功績が餘りに大きいので、恥かしくて申し上げられないのでございませう。」と答へた。元帥は之を聞いて頭を打振り、「いや、さやうな道理はございません。私の微功も閣下の御勳功も、時と處とこそ違へ、國家に盡す精神は

同じことで、責任と心勞とに何も差異はありませんまい。」
 かやうに答へてゐる折柄、ルーズヴェルトは戻つて來て、
 この問答を聞知り、夫人に向つて、「御身は言はずとよいこ
 とをお話したものだ。閣下の偉勳に對しては恥かしい
 極みである。」と、少女のやうに顔を赤らめながら、改めて元
 帥と熱烈な握手を交した。その光景は實にゆかしい限
 であつた。なほこの會合の際、簡單にして含蓄ある元帥
 の言葉を、その通り通譯するには頗る苦心した。」
 かれこれするうち、午後三時となつたので、盡きぬ名残を惜
 みつゝも、元帥は主人夫妻に別れを告げた。
 「おゝ、もうお歸りですか、私のこの邸は、これまで幾多の名

士を迎へたが、まだ君のやうな榮譽ある人を迎へた事が
 ない。恐らくは將來に於てもさうであらう。さらば君
 よ、ますます御健勝で、國家並に人道のため全力をお盡し
 下さい。」

夫人は兩眼に涙を湛へて、堅い握手を交し、

「今日はようおいで下さいました。私は主人と共に永久
 に今日を記念し、毎日お贈物を拜見しつゝ、お目にかゝつ
 たつもりでお懐かしみ申し上げ、且御健康を祈りませう。
 くれぐれも御機嫌よういらせられませ。」

さすが沈黙な元帥も、この誠意の籠つた別辭には深い感動
 を受けたものか、微かに顫を帯びた音聲で、重ねて懇慫に別

れを告げ、自動車に乗つて邸を辭した。折しも颯と吹來る涼風は、残る暑さを何處へか拂ひ去つてしまつた。それから間も無く、元帥は合衆國を辭して丹波丸に乗船し、同國艦隊司令官の指揮の下に、二隻の巡洋艦に灣外まで送られて、歸朝の途に就いた。

今年の春であつた、東郷元帥と會談の折、ふとした話の序からルーズヴェルトの事に及んだ。すると、元帥は、

「彼がゐたらなあ。」

と、さも感慨深げに歎息せられた。眞に同感だ。意氣相投合したこの兩雄は、共に信仰の英雄で、同時に又至誠の勇士である。

東郷元帥曰く、

「天は正義に與し、神は至誠に感ず。」

ルーズヴェルト曰く、

「神を畏れよ、而して汝の義務を盡せ。」

（鐵櫻漫談）

一四 千代の松原

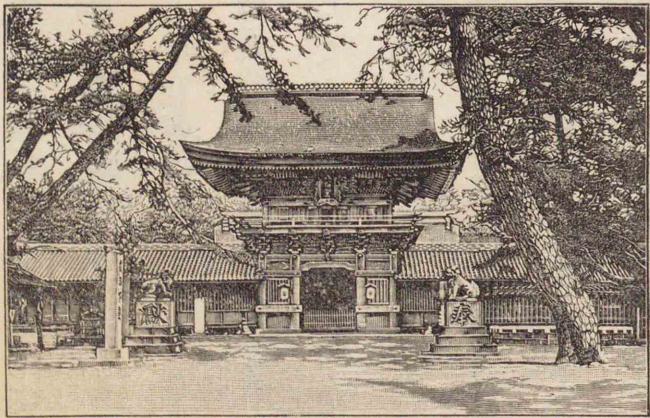
大類 伸

宮崎八幡宮は九州第一の都會たる福岡市から東の方二十五町ばかりにあります。博多灣の波近く、あたりは一帶の松林で、千代の松原と呼ばれてゐます。波の靜かな博多灣の沿岸は、目の及ぶ限り白砂と青松とで、其の間に遙か遠く人家の群つてゐるのが見えます。これが福岡市です。

大類伸
歴史家
文學博士
東北帝國大學教
授
明治十七年東京
市生

がたくさんゐます。女子供がそれに魅を與へるのも、また一興であります。

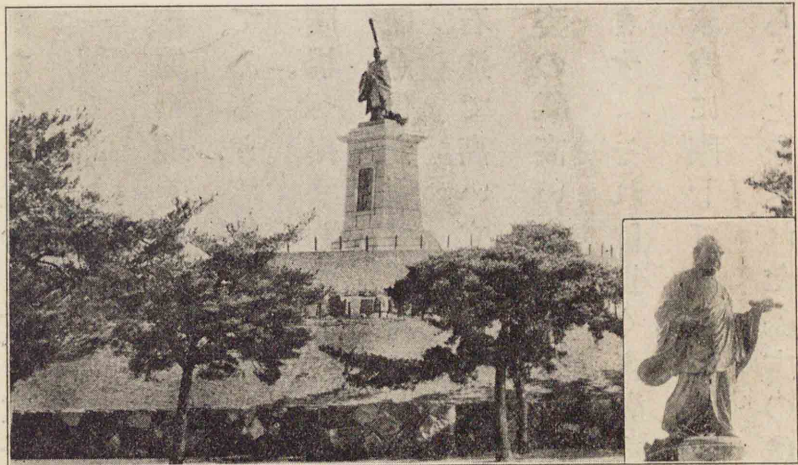
松原の間を彼方此方とさまよつてゐるうち、ゆくりなくも一つの廣場へ出ました。そこには高い記念像が立つてゐました。全部石造で、高い立派な臺の上に、束帯姿の氣高いお方が立つてゐられます。それは、畏くも、蒙古の大舉來寇に際して、身を以て國難に代らうとなされた御方の尊像です。その神々しい御姿で、儼



宮 幡 八 崎 宮

身を以て國難に
代らうとなされ
たお方
龜山上皇
第九十代
在位十五年
嘉元三年(一九五)
崩御
壽五十七

日蓮上人
鎌倉時代の傑僧
日蓮宗の開祖
弘安五年（一九四）
寂
年六十一



日蓮上人像 龜山上帝尊像

然と松林の上から海の彼方遙かに異國の空をお望み遊ばされてゐる御有様は、實に御勇壯の極と申したい程です。
此の御像の前を辭して、暫く歩いてゐますと、又杉林の間から突然眞黒な大法師の現れたのに吃驚しました。それは日蓮上人の大銅像でした。上人は蒙古襲來の以前に安國論といふものを作つて、國民が信仰を

小早川隆景
毛利元就の第三子
慶長二年（一五七）
卒
年六十五

怠ると、いづれ大國難に出逢ふと警告したのでした。が、やがて蒙古襲來といふ大事件が起りましたので、人々は上人の豫言の當つたのに驚きました。さうして上人を信じました。其の關係で銅像を此處に建てたのです。銅像の前には參詣者が絶えません。始終線香の煙が濛々と立ちのぼつてゐます。
それから少し行くと、宮崎八幡宮の樓門の前へ出ました。此の門も、御宮の御殿も、元寇當時のものではなく、三百餘年前小早川隆景の建てたものです。しかし、如何にも神さびた建物で、神威の程も察せられます。私が參詣した時には、門前に鳩がたくさん飛んでゐて、如何にも平和で、昔此處が

戦場であつたなどとは思はれませんでした。社のあたりを徘徊してゐる間に、日も暮方になりましたので、名残惜しくも、別れを告げて福岡の旅舎に向ひました。(史蹟めぐり)

三木露風

名は採
羅風と號したこ
ともある

詩人

明治二十二年兵

庫縣龍野町生

宮崎

福岡縣糟屋郡箱

崎町千代松原に

ある宮崎宮

俗に宮崎八幡宮

といふ

一五 鳩

三木露風

ゆるやかに飛びかふ鳩よ、

宮崎の

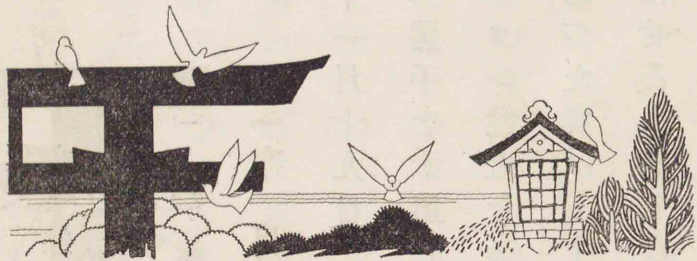
社の門に幾百羽、

くくくくくと鳴く聲の、

樓の棟木の上に充つ。



多々羅の濱
箱崎の海濱



雄鳩雌鳩も幾百羽、

右に左に、上下に、

翼をならし、首をふり、

せはしくあゆみ、日は暮るゝ。

御前みまへの海は果てしなく、

多々羅の濱に寄る波の

くだけは寄り、はひのぼり、

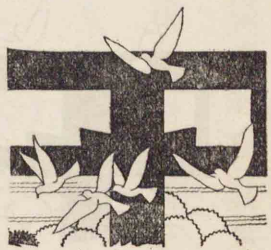
松の根越に光る見ゆ。

戦いくさのあと夢となる。

國の鎮
宮崎宮には醍醐
天皇の宸筆の寫
「敵國降伏」の
額などがある
十一月十九日
明治四十四年
萬國オリンピック
大會

International
Olimpic Meeting
Marathon Race
マラソン競走

高等師範
東京高等師範學
校
僕
金栗四三



國の鎮としづまりいます
宮崎の社の門に幾百羽、
くくくくくと鳴く鳩よ。(青き樹かげ)

一六 月桂冠を目指して

十一月十九日。我が國がはじめて萬國オリンピック大會
へ選手を派遣しようとして、その豫選の爲に日本最初のマ
ラソン競走を舉行する日である。當時高等師範の學生で
あつた僕は、二十五哩といふ長距離は人間の體力で走りお
ほせるものでないとか、マラソン競走に無理をすれば内臓
が潰れてしまふなどといふ浮説に不安を感じながらも、一

國を代表して世界の檜舞臺に上れるかも知れぬといふ夢
のやうな望を懷いて、この半月が程は毎日の練習を怠らな
かつた。

この日は鉛色の鈍重な雲が一面に大空を蔽うて、今にも雨
になりさうで薄ら寒い朝の大氣に、我知らずなる武者振ひ
を禁じ得なかつた。午前十時頃僕等三人は羽田の會場に
着いて、特に設けられた休養所に入り、靜かに身を横たへて
時を待つた。そこには應援に来てくれた先輩や同窓の學
生が居合せて、今日出場する選手たちの批評や勝負の豫想
などを語り合つてゐる。不忍池畔五周競走に嶄然頭角を
現した猛者、八里を二時間に走つた新進をはじめ、鎌倉から、

僕等三人
金栗四三
野口源三郎
橋本三郎
三人ともに當時
東京高等師範學
校の生徒で競走
の選手であつた
羽田
東京府荏原郡羽
田町
不忍池
東京市上野公園
にある
周圍約十二町

コース
Course

六郷川
玉川の下流
川崎市の北を東
へ流れる

ピストル
Pistol

出發合圖員は外套の襟を高く立て、首を深く埋めてコースの説明をした。言葉は時々風の唸りに途切れたが、六郷川の堤から東海道に出て、川崎・鶴見を過ぎ、東神奈川へ行つて引返せとのことである。説明が終ると、合圖員は選手の斜横に立つて、ピストル持つ手を上方に伸した。僕の心臓は早鐘を打つて、動悸が高まる。膝は静止しようとしても間斷なく動く。

「あと一分」。合圖員の宣告は僕の心臓を抉る、動悸は混亂しさうである。

「あと三十秒」。握り締めた手から油汗が滲む。

「あと十秒」。海風の咆哮などはもう僕の耳に入らない。

トラック
Track

食ひしばつた齒が憂々と顫へる。無我夢中である。

「用意！」 其の言葉に續いて「ずどん」と號砲が一發。同時に聲援が四方から涌く。僕は夢か現か、殆ど跳ね飛ばされるやうに走り出した。

トラックは内側に傾斜してゐる。雨の爲に滑る、泥と水とが飛ぶ。走りにくいと思ひながら四百米のトラックを二周する間に、先頭は二番を約二百米も離れて場外に走り去つた。これが北海道出の選手である。續いてかねてから其の名を知られてゐる選手が四人、前後して場外に去つた。僕は其の後からこれら各選手の後塵を追うて場外に出た。六番目である。見渡すと、先頭は群を抜いて唯一人走つて

川崎町
今は川崎市

みる。雨は烈しくなる、道は滑る、寒風も堤の上には一入強く吹きすさぶ。今日の選手を出した各学校の應援旗と聲援隊とは、堤から川崎町へと入り亂れて飛ぶ。練習中に傷めてゐた僕の膝は、堤の途中から遂に疼み出した。跛を引くやうに走つて、東海道に出て、川崎の町に懸ると、百二三十米の前方を走つて行く一人が眼に入つた。せめて五着位にと、膝の疼みを忍んで只管その選手を追うた。かうして競技場から三里も走つたと思ふ頃、不思議にも膝の疼みは忘れたやうに消去つた。何たる幸運であらう。喜悅と自信とが僕の體内に溢れるやうに覺えた。その刹那から急に元氣が出て、次第に其の選手に肉薄して競走を

メガフォン
Megaphone

續けた結果、東神奈川の手前でたうとうこれを抜くことが出来た。膝の好調子に乗じて力走する間に、又その前の二人をも抜いて、意氣揚々と引返點に走り入つた。此處の審判員は熱血兒として當時の運動界に知れわたつてゐる人であつたが、メガフォンを口にあて、
「がんばれつ、がんばれつ」
と熱狂して連呼し、通過の章を背中に捺してくれた。歸りは非常に氣分がよい。殊に三人も抜いた後は、勝利者の誇を意識して、疲労は消失する、氣力は増加する。更に前の選手を抜く氣になつて足を早めた。此の頃から雨はどしや降りになつた。帽子の紫色が流れ出て顔やシャツを

染める。處々に陣取つて激勵の聲援を送つてくれる同窓に逢ふと、一層緊張して走る。やがて川崎町の入口に近づいた時、四五臺の自轉車に圍まれて走る一選手の姿が、街道の松並木の間に見え隠れした。それに接近することが限なく愉快である。いよ／＼その選手に近づいて調子を見ると、僕以上に疲れてゐる。僕は優越感によつて急に身が軽くなつたのを覺えて、容易にそれを抜いてしまつた。しかし他の人から見たら、抜いた僕の足取りも蹠々跟々たるものであつたに相違ない。その時、應援の一人が大聲に、

「もう一人だぞ、たつた一人だ。しつかりやれつ。」

とどなつてくれた。此の「もう一人」といふ言葉が、疲れた僕

に取つては非常な激勵であつた。しかし、此の時は足も腰も膝も殆ど無感覺になつてゐた。

川崎を通過してからは、到る處に三人五人と紫の三角旗を振つて、同窓が聲援してくれる。六郷川の橋に出て見ると、他校の應援者に交つて、紫三角旗が遠く羽田方面まで續いてゐる。僕が長い橋上に疲勞困憊の姿を現すや、「わあつ」といふ鬨の聲と「萬歳」の叫喚とが起つた。

「來た來たあ。金栗だあつ！」

「金栗！ 先の一人を抜けつ！ 弱つて居るぞ！」

吹荒む六郷堤の寒風に和して、鬨の聲が怒濤の如く涌く。いよ／＼羽田は眼前になつた。紫三角旗は雨中を入亂れ

て運動場の方へ飛ぶ。疲れきつた僕も興奮せざるを得ない。滑りがちな堤にさしかゝつてしばらく走ると、もう運動場の旗が見える。その時はるか四百米の前方に、走り行く一人の姿が見えた。これが先頭の北海道出の選手であるが、往路の雄姿にも似ず、疲れた復路の後姿は孤城落日の觀とでもいふべきであつた。僕の姿などは一層悲惨なものであつたらう。

二人の距離は次第に縮められて、僕はたうとう先頭に追いついた。それから二人は並んで走つた。物言ふ餘力も無い。足は弾力を失つて、手を振る力さへたえどである。二人とも同じやうに顎を突き出し、斜め上の方を見つめて

走つた。弾力の失せた足はたゞ上下に動くだけで、體は惰力によつて辛うじて前進するのである。道の兩側に堵を成した應援者は躍起となつて聲援を送るけれども、二人はたゞ無言である。僕は決勝點を目指す外、心頭何物もない。その中に氣がつくと、今まで右側にあたつて振られてゐた手がいつか見えなくなつて、足音も後から聞えて来る。僕は相手を抜いて今先頭にあるのだ。しかし振返つて後を見るだけの餘力もなく、又先頭に立つた事が嬉しくもない。たゞ決勝點に入ることのみを念じてゐた。

運動場の近くには、數町に互つて觀衆の人垣が出来てゐて、紫三角旗は人垣の上に翻つてゐる。「金栗」と呼ぶ聲も聞え

テープ
Tape



金栗選手

僕は最後の元氣を奮ひ起してトラ
ックに駈込んで、蹠跟としなが
らも餘力のすべてをこめて決
勝線のテープを切つた。其の
時は唯重い責任を果した安心
が胸に在つたばかり、觀衆や應
援者の拍手も歡呼も耳には入
らない。第一着といふことが
まるで夢のやうであつた。

翌日の新聞紙で、僕のレコードが二時三十二分四十五秒で
あつて、當時マラソンの世界記録たるアメリカ人の二時五

僕等

金栗四三
三島彌彦

ストックホルム

スウェーデ
ンの首府

橘南谿

宮川春暉
伊勢の醫師

文人
文化二年(四六五)

歿
年五十三

藤樹先生

中江與右衛門

名は原

近江の儒者

慶安元年(三三八)

歿
年四十一

十五分十八秒に比較して驚嘆に値する優秀なものである
ことが報ぜられた。痛む足を引きずつて登校した僕は、友
達からその新聞記事を見せられて、込みあげてくる涙をと
どめ得なかつた。

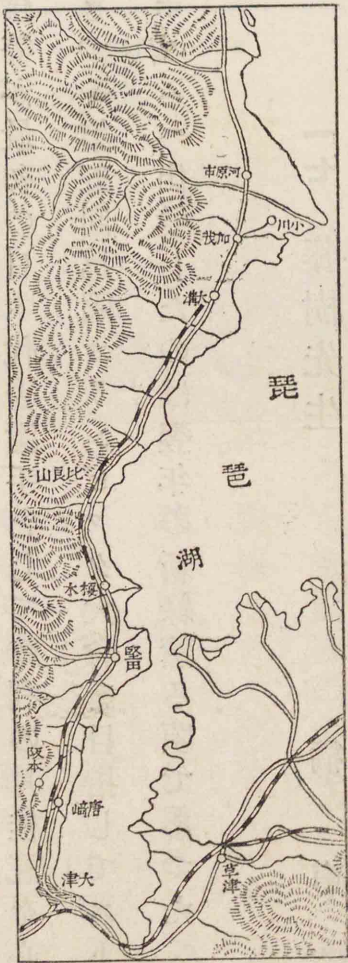
僕等が最初の日本代表選手として、勝利の月桂冠を心に描
きつゝ、第五回萬國オリンピック大會を目指してストック
ホルムへ出發したのは、翌年の新緑薫る頃であつた。

一七 藤樹先生

橘 南 谿

或時、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州
河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊りぬ。馬方、河

原市に歸りて馬を洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。取上げて見れば、金二百兩あり。馬方大い



近附湖琵琶

に驚き、今の飛脚の取忘れたるにこそ。と思へば、そのまゝ榎木に走り行きて、飛脚の宿れる宿に到り、對面して委しく尋ね問ふに、相違無ければ、其の金を取出して返しけり。飛脚は死したる者の蘇りたるこゝちして、喜のあまり、行李

より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、もし此の二百兩なくば、己が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪



中江藤樹 (藤樹書院藏)

に到らん。さればその恩、なかなか言葉のいひ盡すべきにあらねども、まづ當座の御禮までに贈り奉る。と涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚きし顔色にて、そなたの金をそなたに取りをさめ給ふに、何の禮ごといふ

ことあるべき。とて、手にだに取らず。色々にこしらへいへども、更に受けずして歸らんとする故

筆蹟
致良知

致良知

中江藤樹筆蹟

已むことを得ず十兩と減じ、五兩となし、三兩となし、段々減じて、終には金二步となし、せめてこればかりは我が心の悦なれば、受け給ふべし。さなくては、我が心も濟み申さず、今宵も寐ね難し」と、理を盡し詞を盡していふにぞ、此の金を受け申す程ならば、二百兩をも留め置き申すべし。かく返し申すからには、聊かにも謝禮を受くるは我が心にあらず。さりとして餘儀なくのたまへば、さらば、烏目二百文を賜はるべし。これは、今夜休むべき處をこれまで追懸け來れる賃錢なり。これは我が取るべき錢なれば、申し請くべし」とい

ひて、二百文にて酒を買ひて其の家の人に振舞ひ、我も酔ふ程飲みて歸らんとす。

飛脚も感に堪へかね、さるにても、そこはいかなる人にておはする」と問ふに、「名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。只我が在所の近所に小川村といふ處あり。此の村に與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふことをす。某も折節行きて聞き侍りしに、親には孝を盡すべし。主人は大切にすべきものなり。人の物は取らぬものなり。無理・非道は行ふべからず。などいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も、我が物に非ざれば、取るべき理なしと心得しまでのことなり」といひすて、歸りぬ。

熊澤次郎八

號は番山

岡山藩に仕へて

治績をあげた

元祿四年(二三五)

歿

年七十三

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、「さてもこの度は辛き命生きのびて、各方にも對面することゝなりぬ。」とて、ありし次第を委しく語りけり。折節其の家の裏に熊澤次郎八、田舎より上りゐて學問修業最中なりしが、此の物語を聞きて、「其の人こそ誠の儒といふものなれ。」とて、其の翌日すぐに江州に至りて、小川村を尋ねて隨從を願はれしに、人に教へ申すべき程の學徳なしとて更に隨從を許し給はず。熊澤只管に願ひて、二日が間藤樹の門に佇みて歸らず。藤樹の老母之を氣の毒がり、「とにかくに、まづ内に入れ申せよ。」とありし故、いなみ難くて内に入れ、終に師弟の契約をせられけりとぞ。

備前

備前侯池田光政

天和二年(二三三)

卒

年七十四

南條文雄

佛教學者

文學博士

福井縣生

昭和二年歿

年七十九

耶馬溪

大分縣下毛郡山

國谷

雲華上人

畫僧

名は大舍

嘉永三年(五二〇)

歿

年七十八

頼山陽

名は襄

通稱は久太郎

儒者

安藝の人

天保三年(四九二)

歿

年五十三

その後藤樹を備前より招きたまひしに、その身は病身なりとて固く辭し、門人熊澤といふものあり、御役にも立つべきものなり。とて熊澤を出されけり。いづれも格別のことなり。
(東遊記)

一八 知行合一

南條文雄

豊前の山國谷に正行寺といふ眞宗の寺がある。 任職大舎は雲華と號し、文學を好み、書畫を能くし、廣く文人墨客と交り、別して頼山陽とは無二の親友であつた。 山陽は三十九の年に九州を遊歴したが、山國谷の景勝を探つたのは雲華上人の手引であつた。 山陽が「耶馬溪山天下無」と激賞して

忠臣は
忠臣必出ニ孝子
之門ニ千字文の
註)

た老師は、やをら起つて、山陽に面會した。山陽は初見の挨拶をすませてから、自分の書いた「楠公傳」の稿本をその懐から取出した。そして慇懃に、「老師の御批評を」と言つた。老師はその表紙にちらと一瞥を與へたまゝで、手に取らうともしなかつた。さうして、靜かに口を切つた。

「この頃噂に聞けば、藝州の儒者で頼久太郎とやらいふもの、京へ出て酒ばかり飲んでゐて、三年が間たゞの一度も歸省して親の安否を尋ねようともせず、そして忠臣楠公の傳を作つたといふことだが、では御邊の事でござつたか。この時、法海師の鋭い眼光は山陽の面上を電のやうに射た。山陽は我知らず面を伏せた。法海師は更に語を繼いで、忠臣

は必ず孝子の門に出づ。』とは古人の金言だが、三年も歸省せぬ不孝者の筆を以て忠臣の傳を書くとは、大それた事ではないか。楠公の靈若し知るあらば、果して何と思はれるであらう。愚僧もそんな不孝者には會ひたうない。老師はかく言ひ終つて、すつと起つて元の座に歸り、靜かに讀經すること初の如くであつた。

程經て、やつと頭を舉げた山陽は、冷たい汗が首筋を傳うて流れるのに氣が附いた。が、今は取着く島もない。老師の前に默禮して寺門を出た。

「さすが一宗の學頭、偉い和尚だ。」これが當時文名一世に鳴る豪快無比の山陽の腹の底から搾り出された感歎の辭で

あつた。

陽明學
明の大儒王陽明
の唱へた知行合
一の學說

夏日の日
冬日の日
趙衰、冬日之日
也、趙盾、夏日之
日也。
註に「冬日可レ
愛、夏日可レ畏。」
(左傳)

あとで雲華上人に一部始終を話すと、上人は如何にも我が意を得たといふやうに、「さうであつたか。それはよく言つてくれた。貴公は豫て陽明學をやつてゐるではないか。知行合一、今こそそれを實行すべき時である。」といつた。

山陽は覺えず立ち上つて、「法海師は夏日の日、上人は冬日の日だ」といふや否や、早々行李をととのへ、翌日早朝に發足して老母の膝下に歸省すべく安藝の國へと急いだ。

山陽はその後年々歸省して老母を慰め、又これを京都に迎へ、吉野や伊勢にお伴して孝養を盡した。「興行吾亦行、興止

吾亦止とといふ侍輿歌になどに於て數々の美談を遺したのも、
基づく所は兩師の言を虚心に受入れた爲である。「虚にし
て往き、實にして歸る」とは、實にこの事で、山陽が善く學ぶ所
に背かなかつたのも、全くこれによるのである。(修養録)

堀口大學

詩人

明治二十五年東
京市生

一九 雪は降る

堀口大學

雪は降る！ 雪は降る！

見よかし、天の祭なり！

空なる神の殿堂に

冬の祭ぞたげまは闌なる！



たえまなく雪は降る。
をどれ、をどれ、鶴らよ！

うたへかし、鴨ら。

降る雪の白さの中にて！

いと聖く雪は降る。

沈黙の中に散る花瓣！

雪はしとやかに



女

踊りつゝ地上に来る。

雪は降る！ 雪は降る！

白き翼の聖天使！

我等が庭に、身のまはりに、

さゝやき、歌ひ、雪は降る。

降り来るは惠の麴麴なり！

小さき白き雪の足！



地上にも、屋根の上にも、
いと白く雪は降る。

(遠き薔薇)



二〇 雪夜の宴

天町桂月

大町桂月
名は芳衛
文章家
高知縣高知市生
大正十四年歿
年五十七

「何と寒い晩ではござらぬか。成程雪がふる

石見の豪族益田藤包は、雪かりたへまなんふりしきる空を眺めながら、かく

つぶやいた。

「まだ十一月にもならぬに、實にめづらしい大雪でござる。」

と袖たもと縫ぬいううつたのは、出雲の豪族三澤爲虎である。

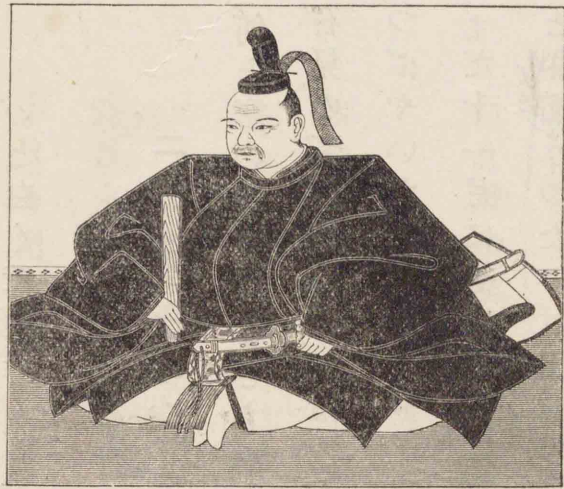
「しかし、益田氏、雪が深いどころの話ではござらぬ。 たつた

六千の兵が八萬の大軍に押寄せられて、我等はまるで囊の

馬野山
鳥取縣東伯郡橋
津村東郷池の北
にある小山

木下秀吉
後の豊臣秀吉
吉川元春
毛利元就の第二
子
尼子氏を滅し秀
吉と對抗してゐ
た
天正十四年(三四
)に歿
年五十七

中の鼠ではござらぬか。此の馬野山は別に要害といふで
はなし、あの高い山の上から大軍に見下されて、たまつたも
のではござらぬ。敵の大將



(料史像肖) 春元川吉

といふ御決心。拙者は餘りの無謀と存ずるが、貴公の御考

は智勇兼備の木下秀吉如何

に味方の大將吉川元春公が
鬼神のやうな勇者でも、六千
と八萬との對陣では、とても
勝てる筈がない。それに何
ぞや、後の大川の橋をうちこ
はして、一足も後へは引かぬ

は。

「拙者も至極御同感でござる。さりながら、陰でいかほど愚
痴をこぼしたとて、しかたのない話、これから共々に本陣へ
參つて、元春公をお諫め致さうではござらぬか。」

「承知いたしました。」

馬の嘶き合ふ聲ばかりを残して、雪は山陰の山野を埋めつ
くした。その白雪も物凄い夜の色に包まれて、日本海を渡
つて來る風ばかりが元氣に叫んでゐる。

兩將は、やがて元春の前へ出た。

元春は一向平氣で、少しも平生の様子と變らない。

「これはよくおぢやつた。我等無骨なる武士の身では

ふかうかはり
そのすま

この初雪に一首といふ風流も出ないが、せめて酒でも飲んで寒さを凌ぐといたさう。

爐の前で酒宴が開かれた。

あまり元春の様子が平氣であるから、兩將も氣おくれがして、それを言ひ出しかねた。

その中に、元春はだんく酔つてくる。終に寐てしまつた。

嗚呼わが豪膽なる吉川元春は、八萬の大敵を前に控へなが

ら高射でぐうくと眠つてゐるのである。兩將はたゞ呆

れて空しく陣屋へ歸つた。

かくて夜が明けた。

秀吉の兵數千人、糧食を種石城へ送らうとして出掛けた。

種石城

鳥取縣東伯郡花見村にあつた城。當時秀吉方の將南條元續がこれを守つてゐた。

元春は鐵砲組に命じて之を打たせ、敵の一將を斃した。やがて敵の兵がなほ萬人餘り續いて出て來た。元春の子の元長・經言の二人はわづかに二千の兵を率ゐてこれに向つた。秀吉は之を見て、急に命じて兵を收めた。南條元續が、「なぜ戦争なさらぬか」と問うたけれども、秀吉は笑つて答へなかつた。

翌日、秀吉は兵を引いて去つた。元長は之を追撃しようとして請うたが、元春は許さなかつた。二三日たつて、元春は馬野山を出立して安藝へ歸つた。

元春がわづか六千の兵で、落着き拂つて馬野山に據り、橋まで斷つて歸路をなくしたのは、どういふわけであらうか。

秀吉が八萬の大軍を率ゐてゐながら、戦はずに去つたのは、
どういふわけであらうか。英雄たゞよく英雄の心を知る。
とても益田・三澤などの知り得る所ではない。



小早川隆景 (藏寺山米郡田豐國藝安)

とにかくに、元春が孤兵を以て馬
野山にたてこもり、秀吉の八萬の
軍と對陣して、遂に秀吉をして空
しく引返さしめたのは、古來山陰
道で起つた出來事の中で、最も壯
快なる出來事である。

この時元春の弟の隆景は、出雲の富田まで来て、そこにとま
つて、馬野山へは援兵を出さなかつた。翌年四月、秀吉は備

隆景
小早川隆景
毛利元就の第三
子
慶長二年(一五七
六) 年六十五
富田
島根縣能儀郡廣
瀬町にある
尼子氏吉川氏の
城址

中に入つて高松城を攻めた。隆景はこの城を援はうとし
て更に援を元春に乞うた。元春の諸將は異口同音に「去年
馬野山の陣の時、隆景公は高みの見物をしてゐながら、御自
分の都合の悪い時ばかり援兵を乞はれる。餘り自分勝手
な話である」と不服を唱へたが、元春はひとり首を振つて「去
年隆景が援けに來なかつたのは、何かわけがあつたであら
う。今その急を聞いては、毛利家のために、だまつては居ら
れぬ。各方がいやならば、拙者は一人でも援けにゆく」と言
ひきつた。諸將は其の友情の厚いのに感服して「ひたすら
に」詫入つたといふことである。

馬野山に籠つた勇ましい決心と、何事も打棄て、弟を援け

に出掛けた優しい心根とは、よく元春の人物性格を表して
ゐる。〔元春は實に日本武士の粹である〕 (桂月文選)

ペンギン

Penguin

杉村楚人冠
名は廣太郎
新聞記者
明治五年和歌山
市生

二一 ペンギン

杉村楚人冠

春の來らんとする南極の曉を待ちわびて、何處よりともな
く南極圏に押寄せる一群の奇怪千萬な鳥がある。この鳥
は氷の上に泳ぎ着くと、さながら隊伍を組んだやうに打連
れて、一様に立つて歩いて行く。これがすなはちペンギン
である。

凡そ天下にペンギンほど人を馬鹿にしたものはない。ぎ
よろりとした目玉を光らせて、人間のやうに兩脚でえつち

らおつちらと立つて歩く。背中には黒腹には白の綿毛が
一ばいに生えて、兩の翼が短く垂れてゐる。翼といつても

短いから、これで飛ぶ

わけに行かぬ。唯時

時これをふたくくと

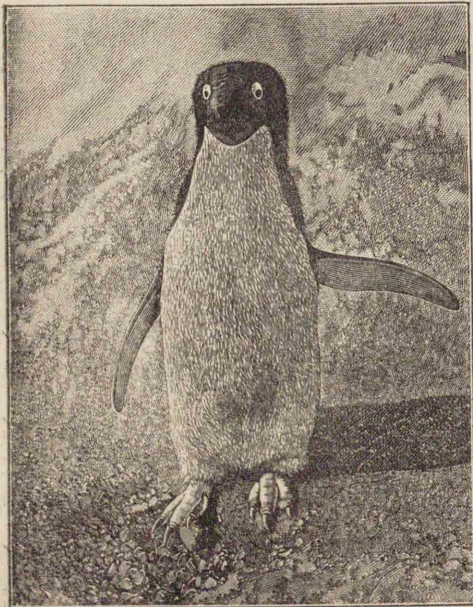
上下に叩いて、一には

身體の調子を取り、一

には之を敵と戦ふ時

の武器に使ふ。見た

ところは、さながら小作りな人間が、黒の燕尾服に白のチヨ
ツキ、白のズボンで、兩手を振つて歩くやう。殊に或種のペ



ペンギン

チヨツキ
Jacket
の訛といふ

ネクタイ
襟飾

ンギンは、丁度襟の處に黒い線があるので、まるで黒のネクタイをつけたやうに見える。人間に似た所はこればかりでない。ペンギンとペンギンとが出會ふ時は、互にお辭儀をするやうに首を下げる。春先此の南極圏へ移つて來て、然るべき處へ銘々の巢を作つてしまへば、農閑の伊勢詣とでもいふ風に、大勢團體を組んで旅行に出掛ける。其の時は、一人の總指揮官があつて、一同は其の命に従つて連れだつて行く。ペンギンの植民地ともいふべき處には、何十萬といふ大變な數が一所に集つて巢をくふが、其の間に何等かの制裁が行はれるものと見えて、餘り甚だしい喧嘩はしない。中には、近所に親を失つ

ノルデンシヨル
ド
Nordenskjöld
(1832—1901)
瑞典の有名な探検家

たみなし子鳥が心細げに巢に取殘されて暮してゐるのを見ると、自分の手に引取つて、養育一切の世話をやくといふやうな義侠心に富んだものもある。又此の鳥は大變な見え坊で、胸の白い處が一寸でも泥にまみれて汚れてゐると、仲間の鳥どもが、例の人を馬鹿にしたやうな顔を見合せて互に嘲り合ふ。こゝらも頗る人間に似てゐる。「善惡共に似た所が餘り多いので、何だか之を殺すには忍びなかつた」と、探検家のノルデンシヨルドも言つてゐる。種類は色々あるが、其の立つて歩くことは一つである。翼が小さくて飛ぶことの出來ぬものが、どうして海を隔てた北の方から渡つて來るかといふと、これは前にも言つた通

り泳いで來るのである。泳ぐのは魚類のやうに身體の調子で泳ぐのであつて、兩翼は唯其の釣合を取るに止る。泳ぐに脚を使はぬことは、兩脚に繩をつけて小舟を曳かせると平氣で泳いで行くのでも知れる。

水では泳ぐが、陸では歩く。處で敵に追ひかけられたとか何とかで大急ぎに駈出さうといふ時は、忽ち身を倒して腹這になつて、一瀉千里の勢で、櫂の様に氷の上を滑り走る。其の早いことは、人間業では到底追ひつけぬ位である。

ペンギンは寒さを知らぬ。如何に寒い時でも、平氣で水中を泳ぎもすれば、平氣で雪の中を歩きまはりもする。何

しろ彼の暖かさうな毛皮があつて、其の下には厚い脂肪がある。暖かいにちがひない。こんな話もある。ペンギンが立錐の地を遺さず集つて來た夜、大風雪が吹きすさんで、一夜やまなかつたが、さて翌朝になると、さしも何萬といふ數を知らぬ位集つてゐたペンギンが、一夜の中に殆ど半分減つてゐた。さてはさすがのペンギンも風に吹飛ばされるか、雪に凍えて死ぬかしたのだらうとばかり思つてゐたら、いづくんぞ知らん、此等姿を隠したペンギンといふのは、盡く雪の下に埋つただけで、やがて晝近くなつて、あたりが大分暖まつて來ると、一同申し合せたやうに、雪をかきわけてもぐり出て來たとのこと。



ペンギンの群居

ペンギンはかはい、恰好の鳥である上に、其の容貌・動作が如何にも滑稽じみてゐるので、極地探検家の無聊を慰めること一通りでない。第一に人を人とも恐れず、まるで友達のやうに人の側へ寄つて来て、何やら話しかける。蓄音機でもやれば、大勢で之を聴きに來る。さうして互に顔を見合せて、如何にも感

に堪へたやうな顔をし合ふ。それに又容易に人に馴れる。或時之を二羽捕つて来て、名をつけて、餌を與へて愛養してゐた者があつた。すると、かはい、かな、彼等は腹がへると、其の人の指をつゝきに行き、遠く遊びに出てゐても、名さへ呼べば飛んで歸る。さうして、其の人が一たび外に出ると、二羽ともひよこくと尾を振立て、ひたもの其の後を追ひまはして、ついて行かねば承知しなかつたといふ。

近頃よく「をさまつてゐる」といふ言葉を使ふ人があるが、ペンギンの容體は、此の「をさまつてゐる」の一語に盡きる。ペンギンほど大をさまりにをさまつたものはあんまりある

まい。僕の見たのは一尺位のものだつたが、これが例の燕尾服・白チョッキですまし返つて、水際をうろついてゐる所は、いやはや呑みこんだものであつた。身の丈三尺もあるといふ種類のをさまり方が思ひやられる。

何分水雪の外に見るものゝない處とて、よくくく無聊に苦しむものと見えて、何かかはつたことがあると、ペンギンどもは随分遠方まで見に来る。大勢で来る時は、必ず指揮官が一人ついて、其の指揮に従つて行く。彼のシャックルトンの一行が自動車を動かしたり、冬營の小屋を建てたりしたのがペンギン社會の大問題となつたと見えて、如何にも珍しさうに、熱心に見に来たといふ。

シャックルトン
Shackelton
(1874—) 英國の有名
な南極探検
家

大勢連れのパンギンが、途中で人間か犬かに出會つた時は大變である。假に彼方から人間が來たと見ると、ペンギン一同遠くではたと立ちどまる。先づ一行中の雄が一羽出て、恭しく頭を下げる。やゝ伏目になつたまゝで、何やらん長々と挨拶の言葉がある。不幸にして人間には唯かゝゝがあゝと聞えるばかりである。挨拶の言葉が終つて後、始めて頭を上げて、今度はずつと仰向いて、嘴で大きな輪を一つ書いて、さてひよつと人の顔を見る。「お分りになりましたか。といふ風だ。もとより以てお分りになるべき筈のものでない。人間はほかんとして立つたまゝだ。此に於てペンギンは、此奴分

らぬわいと見て取つて、今一度前の挨拶を長々と繰返す。それでも分らぬと見たら、今度は他のペンギンどもが、がやがや言つて承知しない。そこで前に挨拶に出た男が、大いに面目を失つて引下ると、今度は代り合ひまして、代り榮えもいたしませぬ別の雄鳥が出て来て、又前と同じかゝゝがあゝゝをやる。

相手が人間なら、譯の分らぬ長ぜりふも面白半分我慢して聞いてやるが、これが犬でゝもあつたら、それこそ騒ぎだ。或時ペンギンどもが右の順序で犬に挨拶をしたが、固より犬に分らう筈はない。そこでペンギンが腹を立てゝ三羽一時に例のかゝゝがあゝゝをやり出した。犬は面喰つて

わんゝと吠える。他のペンギンはきよとんとして呆れて見てゐる。之を見てゐた人間は、いづれも腹を抱へざるはなかつたといふ。

最後に斷つておくが、ペンギンは南半球特有の鳥であつて、最も多く居るのは、南極圏内及び其の附近である。

(へちまの皮)

相馬御風

名は昌治

文學者

明治十六年新潟

縣糸魚川町生

二二 春待つ心

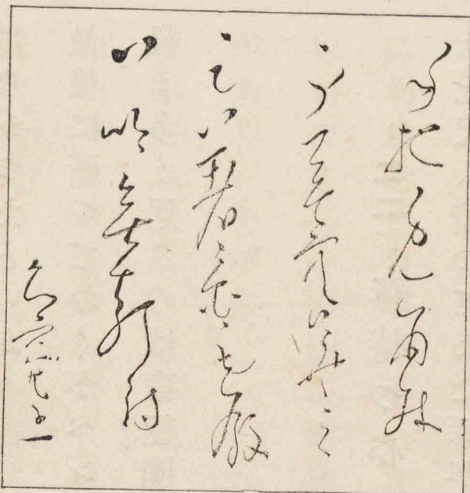
相馬御風

六七尺も積つてゐた雪が、いつの間にかすつかり消えてしまつた。解けた雪は解けるあとから、殆ど全く人間に氣づかれずに、或は蒸發し、或は大地に吸ひこまれ、或は流れ去つ

て、どうして無くなつたか解らぬやうに、無くなつてしまつた。

幾月かの永い間、深い雪の中に閉ぢこめられてゐた北國の子供等が、久しぶりで黒い大地の面を見出したときに歡ぶ有様は、全く言ひ表はしやうのないものである。まだ可なり深く消残つてゐる雪の處々に黒く濕つた土が覗きはじめると、子供等は申し合せた如くつぎつぎにそこへ集つて行く。そして殆ど躍り出さんばかり

筆蹟
手把_ニ兔角杖_ヲ、
身被_ニ空華衣_ヲ、
足著_ニ龜毛履_ヲ、
口吟_ニ無聲詩_ヲ、
良寛書



良寛筆蹟

の嬉しさうな様子で、土を踏廻る。田や畑の處々に見え出した黒土の斑點には、鷗や鴉や雀がまづ群をなして集る。彼等の上にもいきくした歡が輝いて見える。

むらぎもの心たのしも、春の日に

鳥のむらがりあそぶを見れば。

かう良寛が歌つた心もちも、雪國に住んだ者でなければ、深い味ひは分らないであらう。

「長々の月日、雪の下に忍びたる落蒲公英のたぐひ、やをら春吹く風の時を得て、雪間々々を嬉しげに首さしのべて」と一茶が書いた若草の歡も、雪國に住む者のしみとくと味はひ得ることである。大地を踏歩く人の足音の久しく聞

良寛

越後の隱逸歌僧
天保二年(一四九一)
寂
年七十四

一茶

小林彌太郎
信濃の俳人
文政十年(一四九七)
歿
年六十五

えなかつたのを静かな夜にふつと聞きつけた時の一種微妙な懐かしみと歡、そんな心の經驗も、雪國に住めばこそ味はへるのである。

あづさ弓春になりなば、草の庵を

とく訪ひてまし、逢ひたきものを。

かうした人間味の極致を示したやうな秀歌の良寛にあつたことも、北國の冬といふことを全然頭に入れないでは、なかなか理解されまいと思ふ。全く北國の住民の春を待つ心には、生そのものゝ味ひの測り知れない深さが窺はれるのである。 (翻かけ)

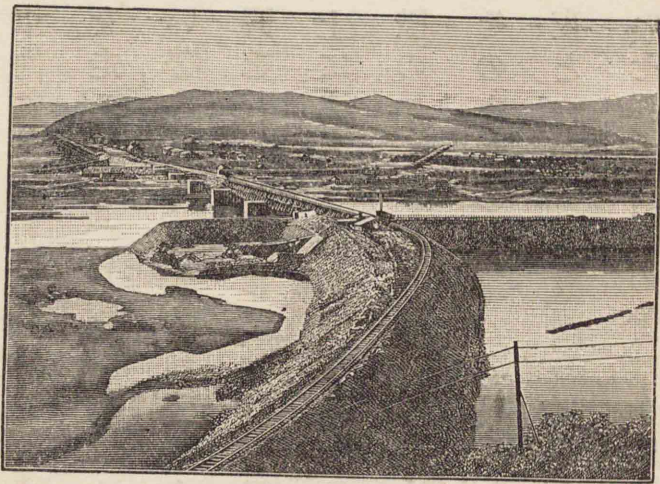
二三 シベリヤの旅

シベリヤ
Siberia
ウエルフネウー
デンスク
Verkhne
Udinsk

車内にごろりとしてゐても汗がにじみ出る暑いシベリヤを走ること二日、ウエルフネウーデンスク驛のあたり、新しい勞農社會主義共和國聯合の國民たる蒙古人の多いのに興を惹かれ、そして、彼等の目も亦物言はまほしげに我等の上に集るを感じつゝ、北へ、更に北へ、曠野をのたうち廻る怪獸の如く、われらの汽車は走りに走る。

その夜である。

夜といつても、故國の夏の夕方の六時頃よりもつと明るい、それで時計の針は十時を過ぎてゐるのである。汽車は、シベリヤ名代の白樺の林に分けいつた。白樺といへば、こ



シベリヤ鐵道

ここまで来る道も、われらの汽車は白樺を燃料として、夢の如く淡く消える乳白色の煙を吐きつゝ進んで来たのだ。漸く夕闇が迫つて来た。窓の左右は、文字通りにはて知らぬ白樺の林である。林の奥は晝尙暗しの感があるがそこに茂る白樺の幹、さては枝のそれゝは、暮れなやむ夕べの微光を吸つて、白金の如く、象牙の如く、怪しげなる光を放つ。白夜！ さうだ、白

夜の國に入りつゝあるのだ。停るべき驛とてもないので、汽車は轟々又轟々、千古の深林の静寂を破つて突進する。吐きだされた煙がちぎれて、林に迷ひ入り、まだ芽ぐみもせぬ白樺の枝々に絡みつき、梢を傳ひ、銀と緑と黒とを溶いて展べた鏡ともいひたい空に、また大自然の祕密をそのまま包むが如き林の奥の闇に、飄々として吸はれてゆく。走りつゞくること二時間餘、さすがにわれらの怪獸も疲れたか、林を切り開き、白樺の薪を處狭きまで積んだ小驛に喘ぎ喘ぎ脚を停めた。給水するのであらう、それらしい響が前方機關車のあたりから聞えてくる。車外に出てみると、昨日とは打つて變つて、刺すやうな冷た

い風が頬を撫でる。時計は十二時を過ぐる數分、日はもうとつぷりと暮れて、車内の人々の眠を守るやう、蒼く磨かれた星は空一杯、燦としてきらめいてゐる。われらは頭をあげて北とおぼしき空を眺めた。故國で見なれた北斗七星、彼の何か意味ありげに並んでゐる七つの星を見て、懐かしいものに接する氣分を味はひたかつたのだ。ところが、たい、どう見てもない。いかにシベリヤは謎の國の一角だとはいへ、星まで消える筈はなからうと見直すと、何のこと、われらの頭上、正しく垂線を描いたあたりにはないか。北斗を頭上に仰ぐところ、我等は、もうそんなところまで來てしまつたのかと、星に對してほんやりものを思つてゐた

Blanket
毛布
Sweater
スエーター
汗襦袢

ら、發車の合圖の鐘が鳴つた。あわてゝ車上に駈けあがつた刹那、餘韻長く汽笛は鳴つた。しばらくして寢ようと、ブランケットをかぶつたはよいが、しみとと寒い。また起き出して、慈母が手づから編んでくれたスエーターを着込み、外套やら何やら懸けて枕に就く。將に眠らうとしても、一度外を見ると、車窓を流れ出る仄暗い燈光の末、林間ところどころに、殘雪の皚々たるが目に入つた。
「大べらばうなシベリヤ！ 昨日の酷暑と比べてどうしたといふのだ。」
思はずも、かうつぶやいたのである。

カーテン
Curtain
窓掛

どれほど眠つたであらう、幾度か寒氣に夢をやぶられつゝ、
うとくしたと思ふ間もなく、また眼がさめた。と、汽車は、
轍のきしり靜かに、危険な個所でも過ぎるのか、匍ふやうに
して進んでゐる。「どうしたのだらう」。さう思つて、頭をも
たげ、ひよいと窓外をのぞくべくカーテンをよせると、これ
はどうだ。麓を曉の闇に沈めた雪の連山が、巍々また蜿蜒
星の消えのこる深い藍色の大空を背景に、ほつかりとうき
出してゐる。

「あつ」といつたまゝ、二の句のつげぬわれらは、むつくり飛起
きて窓に倚つた。眼を凝らせば、大地と思つた眼下は森々
たる湖水、水の面の平板をやぶるものは、氷の島にちがひな

バイカル湖
L. Baikal
シベリヤ中部
の淡水湖



い。バイカル湖だ。そしてバイカルの連山だ。おゝ、こゝ

を眠り過して、どうしてシベリヤ
を通つたといはれようぞ。

まだ日は地平線を出ない。

東から西へ、大空はくつきりと光
の濃淡を織出し、雪の連山の中腹
以上のみが、その肌を見せたのだ。
頂上は、いたゞく雪を淡い紅に染
め、漸次麓に下るに従ひ、紅は紫に、
紫は暗綠色に、そして朦朧たる曉

闇に、腰から下をひたしてゐる。

汽車は湖畔をうねり、幾度かトンネルを出ては渚を傳ひ、飽くまでもしめやかに、——さうだ、心あつてこの莊嚴なる湖畔の曙の靜寂を破らぬやう、——行き行くのである。まだ、日は出ない。

それでも雪の連山は、分また分ごとに衣を更へる。頂上の薄い紅は漸く濃くなり、紫だつた中腹は、かはつて淡い紅になつた。さうして麓一體が漸次にあざやかな紫に變じて行く。

同時にまた、空の色、水のおもて、氷の島々、それが皆忙しく衣をかへる。萬象をして思のまゝのけはひを現させるべく、日もゆつたりと出るらしい。

やがて日が出る。

巨人が光をつかんで、八紘に投げつけたその瞬間！ それは、世界創造の黎明、萬象がはじめて形を得た歡喜に酔ふ刹那と何處がちがはう。今はそれだ。雪の連山は面はゆげにその肌の全部を見せ、麓の方、われらの對岸に當る湖畔一體、清淨純白の雪と氷とは、まさしく喜に燃えてゐる。

日が地平線を離れる。森々たる湖上、どれだけ廣いか見當もつかぬ湖上、それは、その涯を素絹の織目のやうに地平線に没してゐる雪の連山の屏風にまもられ、小波一つさゝやくを見ない。のみならず、湖面の半ば以上は、五月も末に近いといふのに、まだ氷原

ツァール
Czar
露國皇帝

である。廿年前、廿七八年役の當時、われらが今走つてゐる湖岸の鐵道工事は、かどらぬ苦しさに、ツァール政府は、この湖の水の上に鐵路を敷き、運輸を急がせた話がある。その時、さすが堪忍づよい湖水の神も、靜寂と莊嚴とを破られる腹立たしさから、氷の一角を破つて列車を沈めたと、傳説に近い實話が残つてゐる。生きながら氷の底に沈んだ兵士の靈は、今なほこのあたりに迷つてゐるであらう。日が漸く高くなる。

われらの汽車は湖畔を走ること四時間餘にして、煙の出ぬ汽船が數隻、赤さびた船腹をのぞかせて埠頭に繋がるバイカル驛についた。こゝで、給水である。乗客は皆起き出し

て、赤露政府の禁制とあつて、寫眞器はかつぎ出せぬが、雙眼鏡などを携へて、渚に急ぐ。

まのあたり渚に来て見ると、水の清さはまた別段である。浮いてゐる氷の島々は、いづれも水面下に、水上の幾倍かの氷をかくしてゐるが、さて、濁るを知らぬ水はこれを乳白色にのぞかせて、折角隠した氷の苦心をむなしくさせてゐる。その水の冷たさよ。

澄みきつた大氣おゝ、呼ばゝ答へ、手を伸べなば湖面をわたつて來さうな連山、汝の神々しさはいづれの日までつゞくか。山に對してさながら大聖に對するが如く、黙々として見入つてゐると、脚下近く、氷の島の一角が碎け散つた。と

見たのは氷の島ではなかつた、氷の上に翼を休めてゐた雪よりも白い鶴鴿に似た小鳥であつた。唯一の生物——小鳥はいづこともなく飛んで行く。(東京日日新聞)

二四 浦潮より

太田覺眠

Vladivostok
シベリヤ東部の港
太田覺眠
西本願寺派の僧
慶應二年(一八五七)
伊勢國四日市市
生
川上事務官
時の貿易事務官
川上俊彦
莫斯科總領事
南滿洲鐵道株式
會社理事
文久元年(一八五三)
江戸生

拜啓野衲を以て事務官と共々最後の引揚船にて歸朝致すまじと申上置以て西比利亞内地奥深く入込み居る同胞を諸河結氷のため水路の交通全く断絶致すに今日如何なる手段を取らむ引揚船出帆の期

日迄に當港へ到着の見込到底なく幾百の同胞は餘儀なく残留すま事に於成中候令後令々本國の保護を離れし心細く敵國內に残留すま同胞の心情を察する時は野衲を如何よししてもさ方憐むべき同胞を棄てず歸郷すまに忍びず断然敵國內に踏留す事に決心致候野衲がこの事を事務官より申出た時事務官ハ野衲の行爲を以て政府の命令に背くものなりと一色を作して止められたり

且曰く君を露國政府の保護に安んずんとす
 かと野村曰く予は露國の保護に安んずるものに
 あらずその危険に甘んずんとすものなりや
 貴官が居留民が唯一の頼とする帝國の國旗
 を收めて此の地を引拂さんとす今後残留の同胞
 胞はそれ誰をも頼まむ予は身僧侶として此
 の人々の境遇を見て歎よよること能く固よ
 り死は疾くは覚悟せりと事務官の突然起
 つて野村の手を執つて曰く予は最早君の志を

沮止せざるべし予も國民に代つて君の高義を
 感謝するは我が政府に對し君一人を見殺す
 る責を甘んじて之を受かん君も佛院の大悲
 を發揮せんと相對して思ふに感涙は咽ぶや
 あつて曰く前程遠きなり相當の準備ありや
 と野村曰く一片の丹心一軀の尊像是我が為
 二千萬の味方なり而して囊中尚百金の餘財
 ありと事務官直に囊底を拂つて巨額の路銀を
 惠まれ且種々の注意を與へらる候旅順開戦の

事は已に聞得たり當港より戒嚴令を布かれ
 り急最早日本人の居住を許さぬ唯令事務官
 一行の乗込めり引揚船曳見送りたるん後にハ
 當港に日本人とては野衲唯一人こそ候目下
 露人の暴行よりを寧ろ支那労働者の家財
 を奪えんとて襲ひ来る勢甚だ猖獗を極め居候
 野衲一人の力到底之を防ぐに由なく今夜ハ須
 彌壇の下に隠まると一夜天明し彼等の掠奪
 を恣よせり免明朝一着汽車にてハゴッラスク

に到り順次黒龍江沿岸地方に残留せる同胞
 咸歴訪慰問致すべく野衲素より生還を期せ
 ずんども唯此の上は一日も永く命を保ち
 て一人も多量の入を慰問したまひ心願
 する候野衲の此の行必ず大悲の所冥見あら
 せ給ふを確信致候遠く東方を望みて
 陛下の萬歳を祝し奉り候匈々

明治三十七年二月十三日浦潮斯德港棧橋より

太田覺眠

吉江孤雁

名は喬松

佛文學者

早稻田大學教授

明治十三年長野

縣生

アルプス

フランス・ス

Alps ウイス・イタ

リリーに跨る犬

山脈

二五 角笛の響

吉江孤雁

フランスのアルプス山へ行きますと、夕方など、霧のかゝつて来る草原や杉の森の中から角笛の響が遠く近く聞えて來ます。谿を隔てた向ふの山から、その響が林や丘や谷間に笄して、悲しく、物寂しく、小暗くなつた小路の上へかすかにたゆたひます。

何のための角笛でせう。これは終日草原へ放しておいた羊の群を呼集めるために牧童が吹く笛の音です。羊は高く伸びた草の中や、夏草の花の咲きみちた森蔭を自由に遊びまはつて、思はず遠くにさ迷つてゐる中に日が暮れます。



それを番してゐる羊飼の子供は、まづ犬をやつて集めます。

羊飼の犬くらゐ賢いものはありません。幾十幾百とも知れぬ白い羊の群は、草原から、森の中から、八方から犬に教へられて、むくくと雲の涌くやうに、一つ處へ集つて來ます。犬は鳴きながら、八方を駈廻つて、草の中へ、森の中へ、谿の中へ飛込んで、後れて途を失つた羊を一匹残らず探しだします。その集つて來た羊

のまはりを、前へ、後へ、左右へ駈廻つて、後れたものを叱りつ

古い物語

西暦七百七十八年のシャルマール帝のスペイン征伐の史實をもとにして第十一世紀の中頃ローランの歌と題する叙事詩によまれた騎士物語

け、弱つたものをいたはり勵ますやうにして、次第に羊小舎の方へつれて來ます。それでもまだ見落されて迷つてゐる羊が草の中に居るかも知れません。羊飼は角笛を吹立ています。その響があたりの林や谿に響き渡ると、どんな處に迷つてゐるものでも、必ずその響をたよりに集つて來ます。中には頸に鈴をつけた羊もゐます。その鈴の響が、夕暗の中で、草の葉の茂つてゐる中から聞えて來るのは、いかにも寂しい、また懐かしいものです。

この角笛の響には、フランスの古い物語がこもつてゐます。今日アルプスの山中でこの羊飼の笛の音を夏の夕方耳にした人ならば、必ずその物語を思ひ出すでせう。その話と

いふのは次のとおりです。

昔、今から千百年以上も昔のことです。フランスとドイツとの兩國に互つて廣大な領土を占めてゐたシャルマール大帝といふえらい王様がりました。當時のヨーロッパは一時全くこの王様の支配を受けたくらゐの勢でした。ところが、その頃アラビヤ人は地中海からスペインへ攻込んでこれを侵掠し、その鼻息が非常に荒うございました。それゆゑ、大帝に對しても決して服従しません。大帝は大層怒つて、是非このアラビヤ人を征服しようとは決心し、軍隊を率ゐてピレネといふ高い山を越え、スペインへとはひりこみました。そして首尾よく征服の目的を果して、愈、フラ

シャルマール大帝

Charlemagne (742-814) の王

ピレネ Pyrenees フランスとスペインとの國境に連る山脈

ンスへ引上げて來ることになつたのです。さてシャルマーニュ大帝は隊伍を整へて凱旋の途に上り、今やしづくと國境のピレネ山にさしかゝつて來ました。何せよ戰場に數月を過した人々です。早く故郷の空が仰ぎたい、故國の山川が眺めたい、そしてあの美しいフランスの土地から出る紫の葡萄が食べたい、その葡萄で造つた葡萄酒の香が嗅ぎたい。人々は同じ思に胸を躍らせながら山を登つて來ます。部下の者どもがこんなにはしやいてゐるにもかゝはらず、大帝一人だけは何となく沈んだやうな顔附をして、黙々としてゐました。それは何故でせう。申すまでもありません、いつも自分の傍を離れずにゐた甥

ローラン
Roland
(-778)

のローランといふ英雄が傍にゐないためでした。ローランはその時何處にゐたでせうか。この英雄は、大帝の軍隊がスペインを引上げる時、その軍隊の殿しんがりになつて、最後から敵を抑へる任に當つてゐました。といふのは、アラビヤ人は大帝と和睦の約束を結びましたけれども何時その約束を破つて謀叛を起さないとも限りません。それが爲最もすぐれた勇者のローランが最後に残つて、その様子を見て引上げることになりました。そして若しアラビヤ人が叛いて背後から襲ひかゝつたならば、たゞちに角笛を吹いて急を告げる約束になつてゐます。それで若しその角笛の響が聞えたならば、大帝の軍はすぐ引返して後陣のローラ

ンを援ける筈になつてゐたのです。大帝の部下は勇みに勇んで山路を登りつめて、もうそろそろ下り坂の方へ向つてゐました。フランスの空が彼等の眼の前に輝きました。美しいフランスの平野が彼等の脚の下へ廣がりました。彼等は躍り上つて萬歳を叫びました。けれど大帝一人はやはり黙つて、沈んだ顔附をしてゐました。そして今部下が叫んだ萬歳の聲がまだ消えてしまはないうちに、大帝は遙か後方で、角笛の響がしたやうに思つたのです。大帝は不意に馬を停めて、じつと耳を澄しました。大帝はまたたしかにその角笛の響を聞いたやうに思ひました。大帝は部下を顧みて、今角笛が聞えたでは

ないか、ローランの角笛が」と言ひました。部下のものも立止まつて耳を澄しました。けれどその時は、たゞ溪を走る水の音と、林の中の風の響しか聞えませんが、皆のものは、大帝に、「それは風か水の音でせう」と言ひました。軍隊はまた大帝を圍んで坂を下り始めました。けれど大帝は甥のローランのことが何分にも氣にかゝつてなりません。部下の軍隊が悦び騒ぐ中に、たゞ一人黙々として馬を進めてゐました。すると、今度はたしかにはつきりと「ぼう、ぼう」といふ角笛の響が、人馬の騒のなかに聞えて來ました。大帝は「そらつ」といつて馬の頭を立てなほしました。今度こそは明かに皆

のものゝ耳に聞えました。部下のものも一時に足をとめて、聞耳を立てました。角笛はなほ斷續して響いて來ます。「ぼう、ぼう」。太く、細く、怨むが如く、怒るが如く、訴へるやうな、救を求めらるやうな、急を告げるやうな聲が、林の奥から、溪の中から、一面に響き渡りました。忽ち大帝の號令は下りました。「返せ」。全軍は一時に引返して、ピレネ山をスペインの方へと駈けおりました。

ローランは一體どうしたのでせうか。彼は四五人の従者と共に軍隊の最後からしづくゝと山路へかゝつて來たのでした。すると、大帝が心配してゐた通り、それまで従順な風をしてゐたアラビヤ人等は、俄かに大きな喊聲を揚げて、

大勢一時に兵器を執つて、ローランの後からどつと襲ひかかつて來るのでした。彼等が恐れてゐたのはこの英雄ローランとその部下とです。今そのローランが僅かの勢を率ゐて軍の最後から山路へ懸るのを見ると、この人々を討取つてしまひさへすれば、シャルマーニユの大軍とても恐るゝに足らぬと思つたのでせう。いちはやくローランの身邊を八方から取巻いて、兵器をつきつけて來るのでした。そして口々に「ローランよ、早く我が軍に降れ。でなければお前の命はないぞ。シャルマーニユの軍はお前を置いてもはや遠く行つてしまつた」と叫ぶのでした。ローランはその中に突立つて八方を睨みつけ、「汚らはしい。何で汝等

に降参するものか。汝等蠻人よ、我が劍一度鞘を脱すれば、汝等の頭は木の葉のやうに吹飛んでしまふぞ」と大喝しました。その勢に怯ぢて、アラビヤ人等は蜘蛛の子の如く一時四方へ散りましたが、いつの間にかまた多數を恃んで集つて來ます。従者は約束の角笛を吹立てようとしましたが、ローランはそれをとめて吹かせません。そして彼の愛してゐた名劍デュランダールを抜放つて、獅子王のやうに狂ひまはりました。アラビヤ人等はその度ごとに、わあつといつて逃げおりのけれど、執念くもまた攻寄せて來ます。斬殺され、踏殺されて、周圍にはアラビヤ人の死體が山と重りました。けれども多勢を恃むアラビヤ人は一向にひる

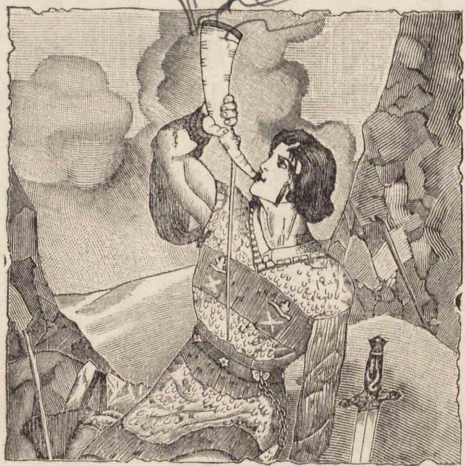
デュランダール

Durendal

まず攻寄せます。或者は山路を上へ登つて大きな岩を動かす、ローランをおどしつけて、早く降参せよ。それでなければ此の岩を落して皆殺しにするぞ」と言ひました。ローランが嘲笑つて身を飛びのけたと思ふと、その大岩は非常な響を立て、却てアラビヤ人等の中へ轉げ落ち、多數の者を壓しつぶしました。

けれど多勢に無勢です、流石豪氣のローランも新手を差換へ入換へての攻手の爲に、次第々々に疲れて來ました。部下の者も或は傷つき、或は死にました。もう如何とも仕方がありません。彼は自ら角笛を取上げて、息のかぎり吹立てました。角笛の吹口はローランの口から出る血で赤く

染りました。二聲三聲、その聲は恐しい大きな牛の最期の叫のやうに飮して、山々谷々に鳴り渡りました。



それを見ると、アラビヤ人等は
一齊に聲をあげて、森の八方か
らローランを取巻いて肉薄し
ました。彼は死者狂になつて、
期最の
荒れ廻り、跳び廻り、人間業とも
思はれぬ働をしました。その

オリヴァエ
Oliver

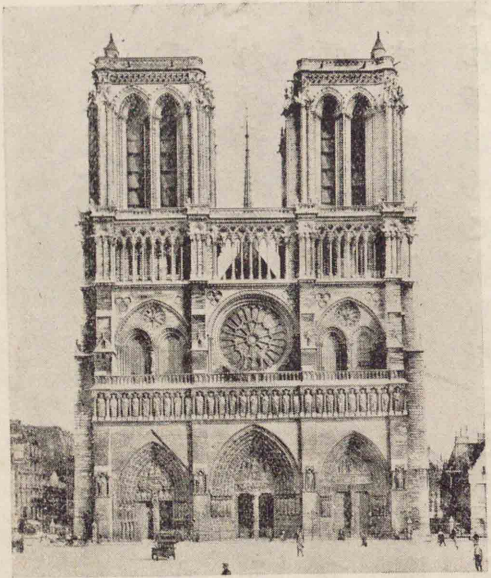
中に、彼の親友で、いつも彼と共にシャルマーニユ大帝を助けて働いたオリヴァエといふものが傷ついて倒れました。彼はローランの名を呼んで、「神様は御身を守り給ふ」といひ

つゝ息を引取つてしまひました。

流石のローランも、今は最期の時が來たと覺悟をきめました。が、それにしても、自分が今まで幾百回となく戦ふ毎に勝つて、肌身を離さなかつた愛劍デュランダールを蠻人の手に渡したくない、むしろ岩を切つて劍を打折つてしまはうと傍の大岩にはつしとばかり切りつけました。するとその劍の先から火花がばつと散りました。その時ローランは、今まで自分が戦つて來た幾度かの勝利の姿がまざまざとその火花の中に浮び上るのを見ました。「おゝデュランダールよ。御身は私と共にシャルマーニユを助けて、多くの國多くの土地を征服して來た。けれど、もう私も最期

だ。神よ、フランスを救ひ給へ。彼はさう言ふや否や、大きな眼に涙を湛へて、一本の松の樹陰へ倒れてしまひました。丁度その時です、ローランの閉ぢて行く眼の前へ、六萬のフランスの兵士が、怒り狂ふシャルマーニユ大帝を先頭に、鬨の聲をあげ、アラビヤ人を追ひまくりつゝ、殺到したのは、大帝は樹陰に倒れてゐるローランの姿を見るなり、駈寄つて、それを抱き起しました。しかし、この英雄は最早この世の人ではなかつたのです、命の限り吹立てた角笛の響は、まだ谷の奥に、残つてゐましたが。

ノートル、ダム
パリにある
キリスト教
會堂
聖母寺の義
西紀三四年
竣工



ノートルダム寺院

せん。大帝が馬に跨り、その馬の前の右と左とにローランとオリヴィエとが立つてゐる勇ましい姿は、今日パリへ行くと人ならば、何人もノートルダムのお寺の前に見出すでせう。角笛の響の中には、今もなほこの英雄ローランの最期の恨がこもつてゐます。夏の夕方アルプス山中で一度でもこの角笛の音を耳にしたものには、その悲しげな、物寂しげな、そして舊いゝ昔物語を籠めた不思議な響

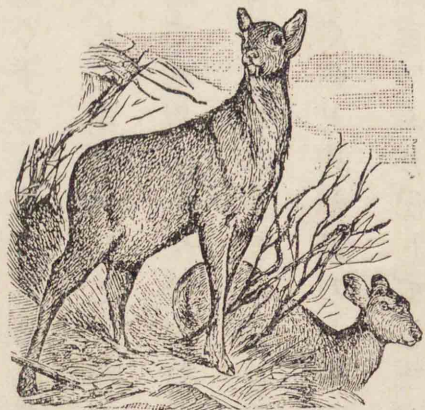
が、永久忘れることの出来ない思出となつて残つてゐること
とでせう。(角笛のひびき)

二六 専心

北原白秋

北原白秋
詩人
名は隆吉
明治十八年福岡
縣柳河町生

麝香の鑑定をする支那人の話が面白い。
それは神わざに近いものである。一體麝香といふものは、
麝香鹿の腹部にある囊にはひつてゐるもので、其のはひつ
たまゝの囊を圓くくりぬいて、麝香商の家へ賣りに来る。
それが非常に高價なところから、賣る方でも、此の頃は愈ず
るくなつて、囊の中に鉛を入れて、知らぬ顔で持つて來ると
いふのである。其の鉛の入れ方も愈、巧妙になつて來て、た



麝香鹿

だ天秤にかけただけでは、其の重さといひ、香といひ、色艶と
いひ、正真正銘とすぐに見わけがつかない。そこで麝香商
の店にも、その鑑定をする男を一人必ず雇ひ入れてあるさ
うである。其の鑑定の仕方が
又悠長なものである。其の男
は一方の掌の上に本物の麝香
を載せ、一方の掌に新しいのを
載せると、兩手を互にゆつくり
と上げ下げしてゐる。唯それ
だけで、其の兩方の重さを掌の中で上げ下げしながら量つ
てゐる。さうして、これが本物か、いかさま物か、愈、どつちか

ナイフ
Knife

分るまでは、一時間でも、二時間でも、半日でも、兩手をたゞ上げ下げしてゐる。
暫くすると、手の上の麝香を入れ換へて見たり、又元の手に移して見たりしては、唯上げ下げしてゐる。全く氣の長い話であるが、それでちやんと解つてしまふから驚く。そこで愈々怪しいときめてしまふと、いきなり鋭いナイフを執つて、ぐいと其の囊の中へ突込んで、きり／＼と割つて、ぼんと鉛をはふり出してしまふ。其の鑑定が、又千に一つの外れはないといふのだから、猶更驚くのである。
其の掌の上の觸覺の微妙纖細な事は、唯それだけを鍛へ抜いたお蔭とはいへ、全く技神に入ると言つていい。それは

驚くべき一種の専心の賜である。

由來支那人といへば、流石に大陸の人間だけあつて、よろづ大まかで、如何にもゆつくりしてゐるが、其の専門的の事にかけると、全く小賢しい國民などの思ひも寄らぬ妙技を發揮する。これは一に専心を鍛錬の結果で、何事も其のねばり強い執着と大愚に近いまでの氣長な修道心とから、遂には人間以上の不可思議にまで達したのである。
金銀の鑑定なども、それは鋭いものだといふ。それなども、手の平に金貨銀貨を一杯に取りまぜて載せると、其の五本の指先から一つづつ面白いほど早く落して行く。右手には細い一尺ばかりの鐵火箸やうのものを持つて、一つ／＼

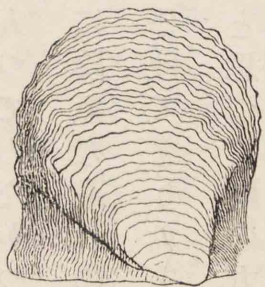
落ちかゝるところを、怪しいと見ると、ちいんと弾き飛ばしてしまふ。それも千に一つの間違もない。それなどは、全く指先の感じから、落ちかゝるとすぐ直覺してしまふので、つまり専心修練の結果である。

それで、をかしい事には、さういふ麝香や金銀の鑑定をする男は、たゞそれだけのもので、世の中の事も知らなければ、何一つ外に能はない。たゞ一日中御馳走を食べて、掌を上げ下げしたり、鐵の棒でちいんとやるだけださうである。

一體人は、目に物を見ながら、頭に入れてゐない事が多い。私が外科の手術を受けて、永い間、下町の或病院にはひつてゐた時の事である。窓の前の中庭に檜と楨とが二本あつ

て、その間に物干竿が一本掛渡してあつた。いつもその方ばかり眺めてゐたので、それが目につかなかつた譯はない。それが驚いた事には、五十日餘りといふもの、全く頭の中に入つてゐなかつたのである。雨がびしょ／＼降つて、非常に陰氣な或日の午後であつた。手術の創痕が、其の日は取分けてきり／＼と痛む。あゝ痛い／＼、あゝ痛い、あゝ／＼と思つて庭の方を見てゐるうちに、その竿がはつきりと目に見えて來た。おや、あんな竿があつたのかと思つて、私は思はず目を見張つたが、五十日の餘もそれを見てゐながら、少しも氣がつかかなかつた自分の迂濶さ加減には、猶更吃驚してしまつた。情ない事だと思ふ。つい目と鼻との間だ。

何時も目に入つてゐたに違ひない。それが見えなかつたのは、専心のない、何時もの空虚な心でゐたからである。體がきりく痛むので、心が痛む、鋭くなる。そのはずみに目に入つた。そこでやつと心に焼きつけられたのである。

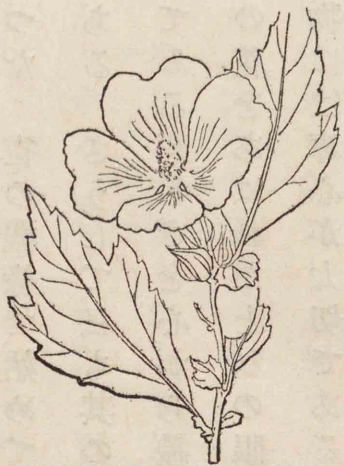


貝ヤコア

私たちはいつも目に見たものを、目ばかりでなく、心に徹して、其の心の眼でしかと見据ゑるだけの引締つた心でありたいのである。名人はまじろかず、そこに隙が一つあつてもいけないのである。

阿古屋貝が病氣をすれば、眞珠が生れる。人も眞實に憂へれば、心の眼が開ける。要するに、人の心は、いつも苦みと憂

との中にきりく痛んでゐなければ、決して磨かれぬ。又何事につけても、其の痛さを痛切に感じ得る心でなければ、いゝ心とは言はれない。



木 槿 の 花

かういふ考から見ると、時には雀もありがたい。

私が住んでゐた二階の窓の向ふに、木槿の垣根があつた。白い木槿の花は毎朝咲いてゐたが、私は毎朝それを眺めてゐながら、さほど心には留めてゐなかつた。

或日何氣なく眺めてゐると、雀が一羽飛んで來た。そして

木槿の枝に留らうとしたが、ついとそれてしまった。枝が動いてゐたのである。よく見れば、白い木槿の花も、枝と一緒に、しみじみと動いてゐた。は、あ、風があるなと私は思った。雀の機縁で、始めて私の心もはつと眼が覺めたのである。さうして、私も、其の白い木槿の花が、絶えず風に動いてゐる悲しさを心から識つた。それから、本當に、白い木槿の花をあはれだと、私の眼の底に焼きつけられた。物には専心が大切であるが、其の専心をつかまへることが、なか／＼出来ないのである。(洗心雑話)

二七 伊能忠敬

幸田露伴

伊能忠敬
地理學者
天文學者
上總國武射郡小
堤村神保貞恆の
第三子
下總國香取郡佐
原町伊能氏を嗣
いだ
文政四年(西元一
八二一)
歿
年七十七
幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士
慶應三年(西元一
八五七)
江戸生

忠敬、年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家をその子景敬に譲るまで自ら抑へて平々凡々の人となり、一意専心、たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も圓滿に、最も美はしく果さん事を期しゐたりき。凡そ才氣ある者の常として、己が欲せざることには一擧手一投足の勞をも惜み、單に己が欲することのみ身を委ねんとするは免れがたき習なり。たとひ己が欲せざることなりとも、その爲さざるべからざることなる以上は、甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へて、わが爲すべき事を爲すは、その人當に才氣あるのみならず、亦實に徳量ある人なりといふべし。世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある

人は少なし。年少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刃の肉薄きが如し、物を截ることはよくすべし、折るゝ恐は免るべからず。されば世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は數へ

も盡しがたし。忠敬が算數曆術の學を嗜み、且これをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮え

しむべし。といふを唯一の希望として、三十餘年一日の如く只管その家業に丹誠したるが如きは、實にその徳量の大な



伊能忠敬(佐原伊能氏藏)

るを見るべきなり。

かくの如くにして伊能家は興りぬ、景敬は家を嗣ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は是に於て圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふることを得べし。この時は忠敬年既に五十歳、常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も前途多望なる青年の春なり、爲すある人には、如何なる場合もわが力を試むべき所なり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當つて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。

後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、
 青年空しく過ぎて身の將に老いんとするを歎ずることな
 かれ。
 さるほどに、忠敬はその郷里佐原を出でて、飄然として江戸
 に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いた
 れ、實に一學生となれるなり。尋常一様に笈を負ひて郷關
 を出で、都門に遊びて師を尋ね學に就くところの書生と異
 なるところは、たゞその若きと老いたるとの差のみ。かく
 して忠敬は身をおのが好める學に委したるが、おのが満足
 し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。をりから
 幕府には曆法改正の擧ありて、これがため、特に大阪より高

筆蹟

來月初高田迄相
 回候様仕度奉存
 候是迄隨身のも
 の共無病に而安
 心仕候測量御用
 向之儀御觸御聲
 掛ゆへ何方にも
 差支無之誠以難
 有仕合に奉存候
 追々猶可奉申上
 候恐惶
 九月八日
 伊能勘解由
 高橋尊師

橋作左衛門といふものを召されたり。作左衛門、東岡と號

す、算數曆象の學に精し
 忠敬急ぎ東岡を訪ひ、そ
 の學の深きに服して直
 ちに師弟の契を結びぬ。
 時に忠敬は五十歳にし
 て東岡は三十二歳なり
 き。普通の人情にては、
 おのれより年若き人に
 會ひては、假令おのれが
 學業などその人に及ば

書は初より國と云ふれ仕を
 ともなひては、若くしての元居
 事、師弟の契を結びぬ
 時に忠敬は五十歳にし
 て東岡は三十二歳なり
 き。普通の人情にては、
 おのれより年若き人に
 會ひては、假令おのれが
 學業などその人に及ば

伊能忠敬筆蹟(流芳遺墨)

ずとも、猶強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は、いかでか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて拜伏するを厭ふべき、喜びてそれが門下生となれり。然れども、同門の學生等は、師たる東岡の若くして弟子たる忠敬の老いたるをば屢、笑柄となしたりといふ。晩學の難きは、實に何れの世にありてもかゝる事實の存するがためなり。是を以て、非凡の士にあらざれば、大抵自ら恥ぢて師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱きて墓穴に入るに至るなり。本來の上よりいへば、老いて學ぶはたま〜その志の淺からざるを顯すのみ、また何の不可かあらん、況やまた何の恥づべきところかあらん。思

ふに區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於ては、たゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ。かゝれば、忠敬と同門學生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明かなることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、終にその學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべきものなきに至れり。

かくて忠敬が始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實にその年五十五歳の時なりき。五十五歳といへば、人は頽齡用ふるに堪へずとする年齢なり。されど、忠敬は氣力旺盛さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて喜色滿面に溢れ、即

日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの元氣勃々として燃ゆるが如き熱心を胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟、早老の人種なりといふ、是、豈我に伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。(露伴叢書)

中國文教科書卷二終

中國文教科書卷二

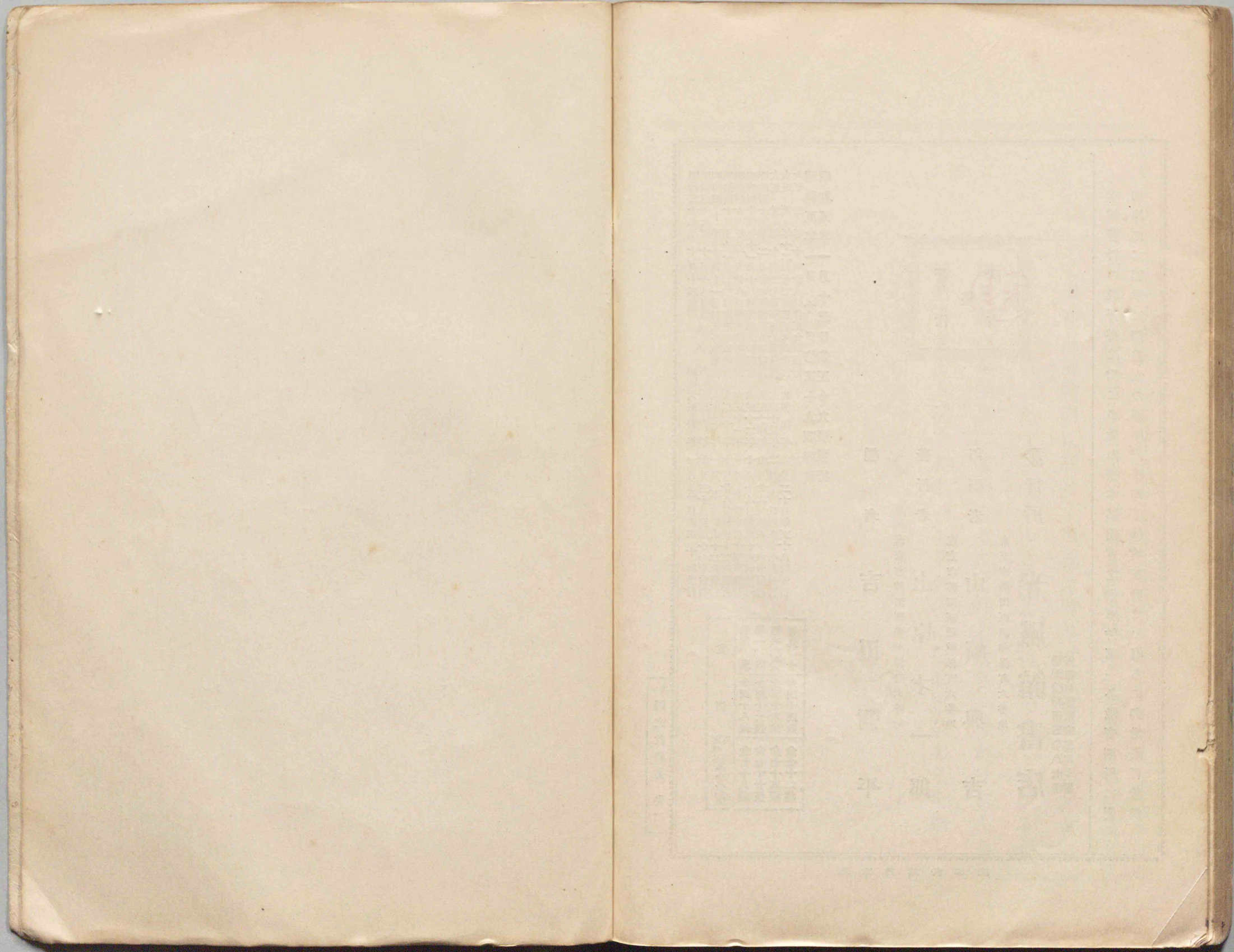
昭和十五年一月十三日	大正十四年八月十三日	大正十四年七月十三日	大正十四年六月十三日	大正十四年五月十三日	大正十四年四月十三日	大正十四年三月十三日	大正十四年二月十三日	大正十四年一月十三日	大正十四年十二月十三日	大正十四年十一月十三日	大正十四年十月十三日	大正十四年九月十三日	大正十四年八月十三日	大正十四年七月十三日	大正十四年六月十三日	大正十四年五月十三日	大正十四年四月十三日	大正十四年三月十三日	大正十四年二月十三日	大正十四年一月十三日
修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正	修正
發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行

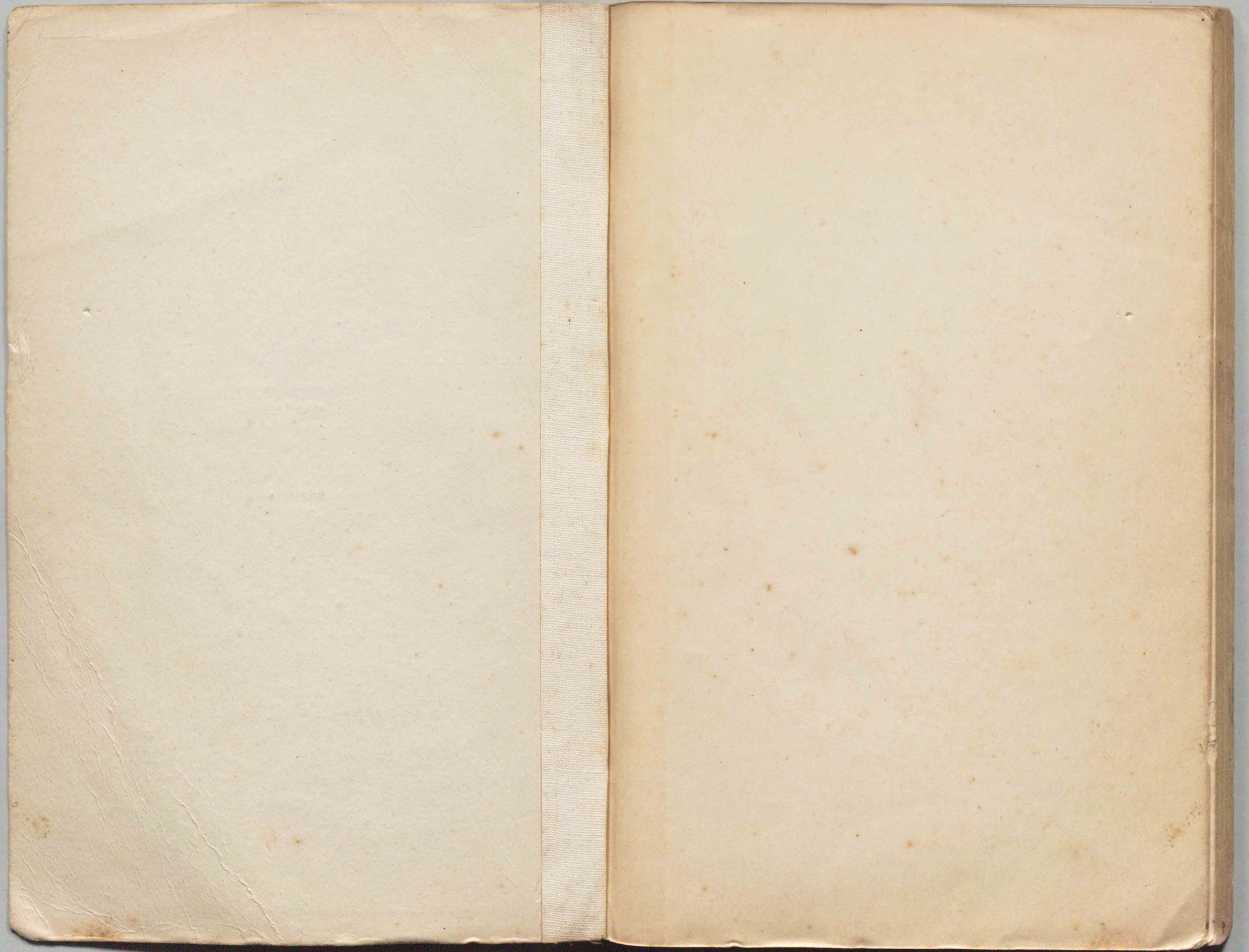
卷三、五	金四十八錢	金七十八錢
卷一、四	金四十七錢	金七十七錢
卷二、六、七、八	金四十六錢	金七十五錢
卷九、十	金四十四錢	金七十二錢



編者 吉田彌平
 發行者 上原才一郎
 印刷者 山崎與吉
 發行所 光風館書店
 東京市神田區通神保町六番地
 東京市神田區通神保町六番地
 東京市神田區通神保町六番地
 (電話) 神田三〇八七番
 (振替) 口座東京三二七番

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御申越被下候はゞ直ちに御送附可致候







第三學部
下

広島大学図書

2000302000



庫
0
00